

バンドリの世界にて俺は生きる [完結]

猫又侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特に生きていて問題もなく16年を

過ごしてきた俺、坂木裕（さかきゆう）

は突然その時を迎える。

そう、俺は死んでしまったのだ

原因は道路に出た女の子をかばっての

死亡、でも大したことでは無い。

別に親しい友達が居た訳でもなく

家族が俺を心配する事は無い

そう俺は、孤独だった。

親にも見放され

学校ではいじめにあい

あげく結果この始末

誰も悲しまず俺の平凡な日常は去っていった。

そんな青年が新たな人生を歩んみ、ガールズバンドの愉快的仲間たちと共に過ごす日常を描いた物語。

バンドリのID貼つときます105033430

目次

新小説大投票！	1
第一話 生まれ変わり（修正ver）	6
第1章	
第一話生まれ変わり	10
第二話「可愛い幼jy妹達（幼馴染）」	14
第三話「湊友希那と弦巻ころとの出会い」	19
第四話 悲しみ	24
第2章	
第五話「再会」	26
第六話「転校」	30
第七話 RoseliaとAfterglow	34
第八話「俺の音」	38
第九話「ポジティブ少女氷川日菜」	41
第十話「氷川姉妹の苦しみそして俺の意思」	44
第十一話「仲直りの氷川姉妹と葛木真也」	51
過去編	
第十二話 葛木真也の過去 前編	55
第十三話 葛木真也の過去 後編	58
美竹蘭編	
第一& amp ;二話「可愛い幼馴染」「蘭とデート」	61
第三話 事件の後	67
第四話 「二人の思い」	72
第五話 「美竹蘭と葛木真也」前編	77

最終話	「美竹蘭と葛木真也」	81
氷川紗夜編		
第一& a m p ;二話	氷川紗夜 紗夜とのデート	86
第三話	「以外な紗夜のギャップ」	90
第四話	思い	94
第五話	「帰路での事故」	98
第六話	「願い」	103
第七話	再開	107
最終話	「氷川紗夜が以外とポンコツで可愛すぎる件について日菜と話をしたい」	111
バンドリイベント それぞれの道、結ぶ茜空		
お気に入り百人突破記念	R o s e l i a 編	皆んなで
l e t , s c o o k i n g !		114

新小説大投票！

さあ、最初の作品はこちら！

No. 1 「最近うちの妹達のアピールが凄いのですが…」
あらすじ

俺の名前は氷川総司（ひかわそうじ）氷川家の長男である！
だが、最近ある悩みがある。

それは：妹達のアピールが凄いのである。

俺の妹の一人氷川紗夜は、何気なくこちらにすり寄って来るし。

もう一人の妹、氷川日菜は毎日部屋に凸って来るし…もうどうなつ
とんねん。

これは俺氷川総司が妹達のアピールを受けながら、何故そうなつた
のか探す物語…

そして、二人の姉妹に恋する物語。

さあ！初っ端から意味不明ですね！（白目）

さあ、次だ次！（ヤケクソ）

No. 2 「人類最強の兵士は氷川姉妹には敵わない」

昔から親に虐待を受けていた、佐藤光夜（さとこうや）

そしてある切っ掛けで戦場に送り込まれるが、そこで数々の戦績を
あげ、人類最強の兵士とも呼ばれるようになった。

ある日俺は戦場から日本に帰還すると、俺の親の代わりに色々とし
てくれていた恩人氷川さんに会う。

そしてその後ろには、当時俺が小学二年の時に一度会ったきりの氷
川姉妹が居た。

これは、人類最強の兵士と呼ばれた青年が、過去に抗い、困難に立
ち向かう、そして二人の姉妹に思いを寄せられる。

そして、色々なガールズバンドの仲間達と紡ぐ一部戦闘のギャグコ
メディ日常？な、物語である。

No. 3 「ギターを趣味で全力でやって居たらヤバイ人に捕ましま
した」

俺の名前は坂木涼（さかきりょう）

俺はある切っ掛けで趣味でギターを弾いて居た筈なのだが…
ある日アイスグリーンの髪をした二人のヤバイ姉妹に捕まる。
これはそんな俺とその姉妹二人との日常を描いた物語である。

さてはて、字数が足りない…どうしたものか…

あ！そうだ！こうなったら、新しく投票する物を追加しよう！

NEW！アンケート！

一つ！

どのバンド達と絡ませるか

二つ！

紗夜ルート、日菜ルートそれぞれを作るか。

以上！

さてはて、まだまだ字数が足りない…

本当は出したく無かったけど下ネタカイどうぞ！（ヤケクソ）

第九話「エイプリルフルで紗夜を無視してみるがその日エイプリルフルに感謝せざる終えない事態に発展しました」

皆んな久しぶり！

突然だが俺はこれから紗夜を無視して見ようと思う、いや、冷たく当たると言うのが正確か、何てったって今日は4/1エイプリルフルだぜ？

だからイタズラをして紗夜がどんな反応するのか試して見るぜ！

午前8:30

「おはようございます真也」

「……………」

「真也?」

ガタツ

「あの、(´_ゝ)飯は?」

「ああ、先食べだから」

嘘です何も食べてませんメツチャ腹減りました、今すぐ女神(紗夜)のご飯が食べたいですが、これは試練なので耐えなければいけないのです

「そうですか…… あの、今日何処かに出かけm「ゴメン、今日用事があつて」そう、ですか……」

嫌ああああああああああ 罪 悪 感 パ

ネエエエエエエエエエエエエエ!

「あと今日は、部屋に入つて来ないでね」

「え?それは……」

「聞こえなかった?そのままの意味なんだけど」

ヤベ、死にそうもういつそのこと今すぐ土下座して、お出かけしたいけど、無理だ

「あの、真也…… 私何か気に触るような事をしたのかしら?」

「は?」

「っ!」ビクッ!

「嫌、気に触るも何も部屋に入つて来ないでねって言ってるだけなんだけど、意味分からなかった?」

「い、いやそういう訳では……」

「それじゃあ、何て思ったの?」

「あの、それは……」

「誤魔化されたらこつちだつて分からないよ?」

「その、ごめんなさい」

「謝られたつて分からないよ、ねえ、紗夜」

そろそろ俺も限界なのですが、これは……

「ごめん…… なさい……」ポロポロ

「泣かれてもコツチが困るんだけどね」

「ごめんなさい、何かしてしまつたのなら謝るわ、だけど…… だけどお願い…… 見捨てないで……」ポロポロ

「はあ、何言つてんの?紗夜」

そう言つた瞬間の出来事だつた

「うああああああああああああああん！」

「！」

「お願い、お願いだから見捨てないで！お願いだからあ」

うん、もう無理ネタバラシします

ギョッ

「！」

「大丈夫、大丈夫だよ紗夜……俺は紗夜のどこを嫌いになんかなるもんか、寧ろ嫌いと言う奴をぶちのめすぞ」

「で、でも真也…… さつきまであんなに冷たかったのに……」ポロポロ

「ごめな紗夜、今日4/1だからイタズラしようと思ったんだが、ここまでなるとは思わなかった、許してくれ」

俺は全力の土下座をかました

「ダメです」グスン

「デスヨネ〜」

「私と出かけてくれなきゃ許しません」

「はい、なんならラ●ホでもどこでも付いて行きます」

俺は勢いに乗って言ってみた

「なっ！ラ●ホ……！まあ、真也が良いなら／／／」

「え？」

「その…… 優しくして下さいね／／／」

あつ、もう行くの決定したのね

「そうか…… んじゃ、い、行くか／／／」

「は、はい／／／」

こうして俺はイタズラのもりでやった事が、紗夜との距離を物凄く詰めるキツカケとなったのであった。

—————

ラ●ホにて

「キス…… しましょう／／／」

「俺にとっては、ご褒美なんだけど」

俺は紗夜をベッドに倒しキスをする

「ん…… チュツ…… んはあ…… ん…… ああ」

俺と紗夜の口の中から銀色の糸が垂れる

「愛してるよ、紗夜」

「ええ、私もよ真也」

オレ達はその日最も深い関係となった

※この後メチャクチャ●●●した

ほらな？あんまり出したく無いんだよ、あんまり下ネタ書いた事ないし。

健全な感じで通してたんだから…

まあいいか（ヤケクソ）

第一話 生まれ変わり（修正Vr）

特に生きていて問題もなく16年を

過ごしてきた俺、坂木裕さかきゆう

は突然その時を迎える。

そう、俺は死んでしまったのだ

原因は道路に出た女の子をかばっての

死亡、でも大したことでは無い。

別に親しい友達が居た訳でもなく

家族が俺を心配する事は無い

そう俺は、孤独だった。

親にも見放され

学校ではいじめにあい

あげく結果この始末

誰も悲しまず俺の平凡な日常は去っていった

「————」誰かの声が聞こえる、その声はとても嬉しそうで、楽しそうだった。

そして目を開けると、そこには凛々しい顔立ちの男の人と美しい女の人が居た。

「お？目を開けだぞー！」

「あら、可愛い」

俺は今の状況が全くもって理解出来ない状態にある。まず、手が上手く動かせないし、思うように声も出せない。そして大人2人の会話を聞くに俺はこの二人の子供らしい。

それにしても生まれ変わりとはラノベでよく起きるくらいの考えだったので実際起こるわけがないと思っていたが、まさか実際に起きるとは思いもよらなかった。

少し考えたが、未だに現状が理解出来ない。だが、俺の性別が男という事だけはハッキリと分かった。が、何故俺がこうして生まれ変わりになどという事が出来たのか。それが新たに疑問として浮かんで来

たので、更に考える。

すると母親は俺の方を微笑ましい目で見て来た。辞めなさい、俺をそんな目で見るな。何だが変な気分になるだろ。

「まあ、真剣な顔しちやっつて、可愛いわね〜やっぱり子供って」

成る程……俺の母親は過保護になりかねないのか……よし、注意して生活しよう。俺がダメになる前に。だが、こうして母親を見ていると昔の母親は俺が産まれた時はこのように喜んでいたのであるか。それとも邪魔だと思っていたのだろうか。

それでも昔の事を考えている余裕はない。俺は今この世界にいるのだから前の事は忘れて生活しよう。と、俺は改めて自分で確認をした。

ただここで一つだけ問題が発生する。

その問題とは、バンドリが出来ないのだ。生まれ変わる前は友人と言える人は居なかったが、リリースからずっとやっていたのでそれが出来ないのは今の暇すぎる俺にとってはとてもじゃないが耐え難いものだった。

それでも確信がある訳ではないが、大きくなればスマホ位は貰えるだろうと考えてバンドリの事は後回しにした。

それにしても……だ。

「それにしてもめでたいことだ」

先程から父親がどっかの民族みたいな踊りをしている。うん、嬉しいのは分かったけどその踊りはやめようね。子供の前でそんなことしたら俺じゃ無かったら覚えちゃうだろ。

「そうだ名前を決めよう、そうだな……真司、真斗、嫌、優という選択肢も……そうだ！真也だ！真也にしよう！」

そうしてアツサリ俺の名前を決められた。そんな適当で良いのかと突っ込みたかったが生憎この状態では突っ込めなかった。

プルルルと、いきなり電話が鳴るもんだから少しびびりしてしまった。俺もやはり生まれただって事だな。そう思っていた俺だったがこの数年後とんでもないことになるのを俺はまだ知らなかった。

俺は絶賛明日のジョーになっております。え？なぜそんな事になってるのかって？それはだな……父と母が俺を連れてその家に挨拶しに行くと言い出して行ったものの名前が

美竹蘭

みたけらん

宇田川巴

うだがわともえ

上原ひまり

うえはらひまり

青葉モカ

あおばもか

羽沢つぐみ

はざわつぐみ

と完全に一致してしまっていた。

ここまで来ると嫌でも察しがついてしまうものだ。恐らく俺は、バンドリの世界に生まれて来たのだと理解した。

こうなっては仕方なく、俺は覚悟を決めてこのバンドリという生活の中で俺は生きて行く事を決めた。

だがそのキャラクター……いや、この場合は幼馴染になるのか。その幼馴染達とどう付き合えばいいのか悩みどころではあるが今は気にしてはられない。

そもそもバンドリの世界の人達と上手くやる以前に他のご近所さんと上手くやれるのかというまず一つこの俺葛木真也かつらぎしんやの物語は不安を抱えつつも幕を開けた。

第1章

第一話生まれ変わり

特に生きていて問題もなく16年を
過ごしてきた俺、坂木裕（さかきゆう）
は突然その時を迎える。

そう、俺は死んでしまったのだ
原因は道路に出た女の子をかばっての
死亡、でも大したことでは無い。

別に親しい友達が居た訳でもなく
家族が俺を心配する事は無い
そう俺は、孤独だった。

親にも見放され
学校ではいじめにあい
あげく結果この始末

誰も悲しまず俺の平凡な日常は去っていった
「————」誰かの声が聞こえる、その声はとても嬉しそうで、楽し
そうだった。

そして目を開けると、そこには凛々しい顔立ちの男の人と美しい女
の人が居た。

「お、目を開けだぞ！」

「あら、可愛い」

（え？）俺は反射的にそう思ってしまった
手が上手く動かせなく思うように
声も出せない。そして大人2人の会話を聞くに俺は、生まれ変わっ
てしまったようだ。

（何処に生まれ変わったのか分かんるとは言ってる居ない）

（えーと、一つ言わせてもらおう

どうしてこうなった？

何故俺が生まれ変わったんだ？

?!また俺の親らしき人物が話をしている)

「まあ、真剣な顔しちゃって、可愛いわねく
やっぱり子供って」

(あくアレだなこりや相当自分の子供を大切にする親だな……)

前の親も生まれた時こんな感じだったのかな

まあ考えてもしやーないか。

もう前の人生のことなんて、あーでもなく

バンドリ出来んのはなー)

当時俺がハマっていたゲームがバンドリだったのでそれが出来な
いとなるとそれはそれは

辛いことだった

(ま、いつか成長したらまたスマホ買って貰ってやれるだろうし)

「それにしてもめでたいことだ」

(俺の父親らしき人よ、そんなに喜ばなくても良いんでね?)

「そうだな名前を決めよう、そうだな……」

真司、真斗、嫌、優という選択肢も…… そうだ！真也だ！真也にし
ようー！」

そうしてアツサリ俺の名前を決められた。

「プルルル」

(ん?)

なんだ電話か驚かせるなよ。

そう思っていた俺だったがこの数年後とんでもないことになるの
を俺はまだ知らなかった。

そんなことも知らない俺は4年間過ごし

少しは動けるようになった。

そしてある日「もしもし、あ！美竹さんどうしたんですか急に、え
?!子供がお生まれになったんですか?おめでとうございます」と父は
柄にも無く喜んでいた

(ん?でも美竹って何処かで聞いたような……)

そんなこともいざ知らず今度母が

「ねえ貴方」と父に話しかけて来た

「ん？どうした岬」と、不思議そうな顔を
をする父（ん？今度はなんだ？）

俺が聞き耳を立てていると母がこんなことを言った「宇田川さん家
と上原さん家と青葉さん家と羽沢さん家に赤ちゃんが生まれたら
しいのー！」と喜ぶ母。

と、そこで父が「そうかそりやめでたいコツチも今連絡があつて美
竹さん家も子供が生まれたらしい。」

「まあ、でもあまりどのご自宅も言う余裕がなかったみたいでどのご
自宅も今日言うことになつたらしいの、日にちがそれぞれ違うらしい
んだけどね？」

（近くの家の人か？そんなに喜ぶほどその家と親しいんだなうちつ
て。）

（でもやっぱりどつかで聞いた事が有るんだよなあ、どの苗字も、美
竹、宇田川、上原、

青葉、羽沢……え？ちよつと待てよこれってまさか）そうそれ
ぞれの苗字を知っている理由は、ただ一つその苗字は、バンドリの中
に出て来る Afteuogloou のバンドのメンバーの
それぞれ苗字だった。

（あつはつはでもさすがにそれは思い違いか

さすがにそんな上手く行くとは………）

数分後（マジだった〜！）

父と母が俺を連れてその家に挨拶しに行く

と言い出して行ったものの

名前が、美竹蘭、宇田川巴、上原ひまり、

青葉モカ、羽沢つぐみと完全に一致してしまっていた。

（という事は？今更ながら思うに俺、バンドリの世界に生まれて来た
の〜?!）

（くっこうなつたら仕方がない俺は、

俺は、バンドリの世界で生きていくぞ〜！）

かくして俺のバンドリの世界にて俺は生きていくことを決めた。

だがそのキャラクター、嫌、少女達と過ごす日常がまっているのんぞこの時の俺は知りもしなかった。

(あ、でもバンドリの、じゃ無くて

ここら辺の人達と仲良くやって行けるのか？そもそも)まず一つこの俺葛木真也かつらぎしんやの物語は不安を抱えつつも

幕を開けた。

次回「可愛い幼jy妹(幼馴染)」

第二話 「可愛い幼JY妹達（幼馴染）」

俺がバンドリの世界で生きていくことを決意して早6年、俺はすくすくと育っていき今では小6に至る、そしてほかの5人はと言うとピン〜ポンと爽やかなインターホンの音がなり母が「はいはい」とパタパタと音を鳴らして玄関に向かって行くをとが聞こえる。

そして数秒後「真也〜蘭ちゃん達が来てくれたわよ〜」と俺を呼ぶ。だが俺は断固として返事をしない

（何故なら、あの蘭ちゃん達と仲良くなり打ち解けたのは良いのだが、なんと言うか

その…… なつき度がね？ヤバいのよ。

家に来るのは良いんだけどさ？

家が近いからと言って毎日家に来るんだぜ？

しかもメツチャ体に張り付いて来る別嫌ではないが疲れて離そうとすると巴ちゃんだけ素直に聞いてくれるんだけどほかの4人が泣きそうな目でこつちを見て来るもんだから断れなくて「良いよ」と言うところから同じ体勢で三十分ぐらいは動けないしかも巴ちゃんはそれならばと言わんばかりにまたくつついて来る。その繰り返し。

しかも蘭ちゃん達はもう小学生四年生だと言うのにお風呂をせがんで来る。まあ可愛いから許すけど。

だが今回ばかりはそれは無理でるそろそろ

テストなのだ記憶があるとはいえ、小六の勉強を怠ってはいけない。

ま、大体分かるからしなくていいんだけど。

でも、なんか大切だなーって思っちゃうのでやっている。

だがそんな浅はかな考えは凄くアツサリと消えて行った。

下が妙に静かだった。

「？諦めてくれたか？最近友達が出来たと言っていたから、そっちの方に行ったのかな？」

そう最近蘭ちゃん達は友達が出来たと言う
それから少しは家に来る回数が減ったので
安心していた。

だがその時、ダダダダと階段を勢いよく上がって来る音が聴こえて
来た。

その時俺は悟った。

(コレ積んだくね? (; ω ;))

そんな事を考えている間に少女5人がなだれこんで来た。

すると蘭が「真也兄ちゃんまた勉強?」

と呆れた顔で言ってくる

すると巴が「そうだよ真也兄い」

続いてモカが「そうそうく真也兄いも少し

私たちと遊んでくれないとく」

そしてつぐみはただ俺を見ているだけ。

実際コレが一番落ち着くのだが、するとひまりが「真也兄ちゃんく

!」と勢いよく抱きついて来る。

「うわー!」思わず驚いてしまった

だがそんなの気にせずひまりは俺に顔を

スリスリしてエへへと言っている。

「はくまたか。」そんな風に思っていると

ほかの3人も「えくい!」と飛んで来た。

「うああああああああああ」

さすがに4人に抱きつかれるのはきつい。

だが1人だけ我慢して居る。

巴である、巴は皆んなのお姉さんのようなポジ

なのだろうか?。過ぐす我慢して居る気がするってかメツチャソ

ワソワしとるがな!

そんな巴を見て居ると、なんだかともだけ

悲しそうだなあと思ひ。

「皆んなちよつと離れて」俺がそう言うと言つて皆んな「えく」と駄々をこね
るだがそんな事を言っている場合ではない。

そう、そろそろ巴が泣きだしそうなのだ。

こりやいかんと思つた俺は一旦みんなに離れてもらう事に成功した。

「巴？」と俺は巴を呼ぶ。

「な、何？真也兄い？」と聞いてくる。

俺はため息を築きつつも俺は巴を抱きしめた。

「////////////////////?!」

巴はびっくりしているようだが、この真也兄いからは逃れられんだよ巴ちゃん。そう思いながら巴の頭を撫でる。

「////////////////////」するとドンドン巴の顔が赤くなつて

行く。すると蘭達が「ズルイ巴ばかり〜」

と言ってくるが。

「仕方がだろ巴は、みんなと違つて我慢してるんだから。コレはいつも我慢してる巴の『褒美。』」と言つて蘭を説得する。

そして、「蘭達も少しは巴みたいに我慢するところやってあげるんだけどなー」

チラツ(?!▽?)

蘭達を見るとものすごい膨れて居るのが分かるがこればかりは仕方がない。

いつも我慢して居る巴を見習えつて事だな。

すると胸元に苗字な違和感というか、

匂いを嗅がれて居る感じがした。

気になつて下を見ると巴が俺の胸元にうずくまって匂いを嗅いでいた。

まあコレぐらいならいいだろう。

と考えて居ると蘭が、

「んじゃあいつものやってー!」

とせがんでくる。

よっほど俺と巴が羨ましかつたんだなく。

と思つて居ると。

早く早くと急かされる。

最近やって居る事それはギターを弾く事だ。

しかも曲は自作。

我ながら泣きたくなくなってくる。

親父にギターを教えてもらったことがきつかけで、俺も良く蘭達に見せるようになっていた。

「♪」俺が歌って居るときは皆んな静かになるコレは良い効果が期待される。

—————

「ふうどうだった？」と俺は演奏を終えると皆んなに聞く。

皆んな口が空いたままだった。

すると皆んな目をキラキラさせて

「今のすつごく良かった。今度蘭達にも教えて！」と皆んなでせがんで来た。

もちろん巴だって例外ではない。

巴もどのすごく目をキラキラさせていた。

すると母さんが入って来て。

「はい、皆んなそろそろ時間よ〜」

と蘭達を呼びにくる。

「「「はい！」「」」」

と元気良く返事をする。

そして「じゃあ皆んな」

と言うと皆んな

「「「じゃねお兄ちゃん！」「」」」と言ってくる。

我ながら、やはり可愛いと思ってしまう俺は

ロリコンなのか？

そんなことを考えて居ると皆んなそそくさと帰っていった

「あいつら来るのも早いし、帰るのも早くね？」

すると母さんから「真也、ちよつと買い物行ってきてくれない？今手が離せなくて」

と言ってくる。

「わかった」と返事をして下に降りる。

「で、何を買ってくれば良いの?」

と聞くと

「チヨット野菜を買ってきて欲しいの」

と言う。

「ゲツ、隣町じゃん」と俺が言うと

母さんは「ごめんね〜でも明日らか母さんと

お父さん居ないから」と言う。

「あつそういえば二人で新婚旅行行くんだっけ?」

家の親は年に一度、結婚記念日の時に毎回旅行に行く習慣が付いている。

だが、ここ二、三年は、親父の都合で行けなかったのだ。

「そうなの、去年はあの人の用事が合わなくて行けなかったけど、今年
は取れたみたいだから。」

と嬉しそうに言う。

「はいはいわかりましたよ、んじや行って

来まーす」

そうして俺は家の扉を開け、外に出た。

「えーっと、確か駅はあっちだったよな?」

と言いながら、駅を目指し歩き始めた。

次回「湊友希那と弦巻こころと出会い」

第三話 「湊友希那と弦巻ごころとの出会い」

「♪♪」と清々しい入店音が聞こえる。

ここは隣町のスーパ―の店内である。

「さくてとキャベツ、ニンジン、ほうれん草
、ジャガイモ、キュウリ……」

と次々にガゴの中に入れていく。

「よしコレくらいでいいか。」

用事を済ませると俺は会計をし、そそくさと出て行った。

「うゝさつむ、そろそろ春なのにどうして

まあこんな寒いんだ？」

と、俺がぶつぶつ呟いて居ると、公園の方から、泣き声が聴こえて来た。

「？なんだ？」と不思議そうに近づくと、

近くの物陰から視線を感じた。

「！」すぐさま見るとそこには、

黒服の人が居た。

(こ、コレは伝説のオ○ガ回) そんな事を思いながら、よく考えると、バンドリの女の子、

の中にもそんな子居たなくと、考えるが、
それり困って居るようだから、話ぐらい

聞かなければならないと思ひ話しかけた。

「ねえ君？何で泣いてるの」

と聞くと、その少女を見ると綺麗な金髪の、少女だった。

その少女は、「貴方は誰？」

と不安そうに聞いてくる。

「？俺か？俺は葛木真也だ。」

そう答えると今度は少女が

「そう真也、わたしは弦巻ごころ」

と自己紹介をしてくる。

やはりか、と思う。

弦巻ころろと言えばバンドリの中で、
ずば抜けてハツチやけて居ると言う少女、
それが弦巻ころろだ。

確か家がものすごい金持ちだとか。

あつても住所とか特定されないよな？

と不安を抱くが、今はそんなところではない。

「じゃあ君は何で泣いていたの？」

と聞くと、「み、みんなね、わたしがやりたい事やってるだけなのに、
調子乗ってるとか

、ウザいとか言うの、わたしはただやりたい事をやって居るだけなの
に。」

そう語ってくれる弦巻ころろは、

物凄い寂しそうだった。

(きつと、ころろちゃんに対する嫉妬…)

お金持ちって羨ましくなってしまうからな)

「ねえ君、でも君が他の人から言われる筋合いは無いはずだよ。だつ
て元に……。」と言いかけたところで、弦巻ころろがいきなり、

「ころろー！」と叫び出した。

なにかと思うと、「あたしの事、ころろって呼んで！」と言ってくる。

よほど君が嫌だったんだろう。

「じゃあころろ？君が嫌な思いをしたくないなら、周りも巻き込んで
見たら、どうだろう？」と尋ねる。

「周りも巻き込む？」キョトンとした顔で言ってくるが、俺は

「ああ、周りを巻き込んで、そしてころろがやりたい事を皆んなでやれ
ば良い、そうすれば皆んな笑顔になる。そんなのはどうだろう？」

と聞くところろはすぐ立ち上がり。

「ありがとう！貴方のお陰でスッキリしたわ

、ありがとう真也！」

ああそのまま名前と呼ばれるのも悪くない。

と思つて居ると、ころろは

「また”会いましょう！」と言つて去つて行つた。そしてそれにつ

いて行くように黒服の人がこころを追いかけて行った。

「?今またって言ったよな?」

そんな不安を抱えながら、俺は公園のを出る。

1年後

「んじや真也俺たちは行つて来るから、

留守は任せたぞ」

と親父が言ってくる。

「ああ分かったよ、二人で楽しんで来な」

そう言つて二人は新婚旅行に出かける。

あれから1年経ち俺は中一になっていた

今蘭達は小5だ。

そして親父達は今年も新婚旅行に行くらしい。「ふうく暇だから外でも歩いて来るか」

そう思い、家を出る。

数分後

俺は公園を見つけ、ベンチに座った。

「いやーここはいつ来ても落ちつくなー」

と考えて居ると、「♪♪」と歌声が聴こえて来た。

「ん?とても良い歌声だなあ」

と聞いて居ると突然誰が歌つて居るか気になった。そうしてその歌声が聞こえる所に

行くとそこには、銀髪の綺麗な子がいた。

だがその目はとても悲しそうだった。

歌が歌い終わると、俺は拍手をした。

「?!」と女の子はこつちを向くがそれは、

警戒して居る目立った。

「大丈夫、何もしないから。」

(あつ、あれくコレって危ないおじさんが使う言葉じゃね?)

と不安だったがすぐ理解して、警戒を解いた。

「それにしても、綺麗な歌声だったね?

もしかして、君が歌っていたの?」

と尋ねると、コクン、と頷いた。

だが耳は相当赤かった相当恥ずかかったのだろう。

「ねえ？君の名前を覚えてくれる？」

と聞くと素直に口を開いた

「湊、湊友希那」この子もバンドリの世界にいたのか……と、すると、もしかしたら。

「ねえ何で湊ちゃんは歌っていたのかな？」

と聞くと、「……………」と口を開かない。

しかも口を膨らませえ居る。

ヤベエかわゆい。

そう思っ居ると、「お兄さんは？」と聞いてくる。

あつ名前か、そういえば覚えてなかったな。

「俺は葛木真也、真也でもなんでもいいよ」

という、湊ちゃんは、「分かった」と言っ居る数分なにか考えて居る様子だったが

いきなり「じ、じゃあ真もお兄さん」

と恥ずかしそうに言っくる。

俺は嫌われてたかと、思い少し不安だったが、少しは仲良くなれたのかな？

と思っ少しホツとした。

「それでなんだけど、湊ちゃん何で一人で歌ってたの？」と聞くとまた反応が無い。

まだ何かあるのかと思っ居たが俺はすぐに察した。

多分自分も名前で呼んで欲しいのだろう。

目が完全にそう言っ居る。

試しに俺は、「友希那ちゃん？」

と呼んで見た。

すると「何？」とすぐ反応した。

やはり名前で呼んで欲しいらしい。

そして俺はそのまま話を進める。

「ねえ？友希那ちゃんは何で一人で歌ってたの？」と聞くと、「お父さ

んがね、バンドをやっていたの。でもね、最近人気がかくなって来て、お父さんバンドを辞めちゃったの。」

そう話してくれる友希那ちゃんの顔は物凄く、悲しそうだった。

「だからね、私お父さんが立てなかった、

ステージに立ちたい。そうしてお父さんの夢を叶えてあげたい」
そう言う彼女の目は

物凄く光に満ちていた。

「だから、ココで歌の練習をしていたの。」

「そうだったのか……」そう思っ居ると、俺はあることを思い着いた。

「友希那ちゃん、これから毎日とは行かないけど週二回俺が歌を聞いてあげるよ」

と俺が言うと友希那ちゃんは、

「本当……」と喜んでいた。

本当かわゆす。

そうして俺達は週に二回会い、友希那ちゃんの歌の練習を手伝うことになった。

だがある悲劇が俺を襲った。

次回「悲しみ」

第四話 悲しみ

あれから1年経ちが達俺は中三になっていた。

「それじゃ行って来るな。」

と親父が言ったそう今年も新婚旅行に行く日が来たのだ。

だが俺は行けなかった。

そう受験勉強をしなければならなかったのだ。

今年は蘭達、去年は友希那ちゃんが入学して来て、学校が賑やかになつて来た。

だが一つ問題がある。

それは学校での蘭達だ、蘭達は毎回俺に会うたびくっついて来るとし、友希那ちゃんは、恥ずかしそうに俺に話しかけるもんだから、周りの男子の怒りの視線が、ヤバかった。

「来年は行くこうね。」と俺は母さん達を見送った…。だがそれが叶う事は無くなった。

そう、母さん達が死んだ。

原因は母さん達が乗っていた飛行機が飛んでいる途中、トラブルで墜落したのだそうだ。

丁度受験先の学校が決まった時だった。

俺はシヨックで不登校になってしまった。

蘭達は見舞いに来るが俺は、家には入れなかった。

「今は誰とも会いたくない……。」

これが俺の気持ちだった。

すると俺は母さんの親戚の家から引き取られることが決まった。

蘭達は嫌がっていたが、俺はこの街から

離れたかった。かつて生きていた親父達との記憶が残っているこの街から。

だが出て行く前に一つやっておきたい事があった。

そして蘭達を集めた。

「話は聞いてると思うが、俺はこの街をでて行く」

「「「?」「」」」

やはり驚いて、顔が暗くなる。

「ねえ本当に行つちやうの？」

と、蘭が聞いてくる。

他のみんなも俺を見てくる。

「ああそうだ。だがもう変えられん。」

そういうと、皆んな、泣きそうになる。

だがもう俺が決めた事が変えようかない。

だがこれだけは、やって起きた来たかった。

「蘭」と、蘭を呼ぶ

「何？真也お兄ちゃん」グスンと泣きそうになりながらも答える。

「俺がいなくらる前にコレを渡しておく」

そうやって差し出したのが

「？ギ、ギター？」

と、いつてくる。

「そうだ、もし蘭達が音楽をやるといふ時のために俺が使っていたものをやる」

そうして、蘭とモカにはギターを、ひまりにはベース

巴にはドラム、つぐみにはキーボードをやった。

モカ曰く、「蘭がギターなら私もギターをやる」なんて事を言ってきた。

それを渡し終えると。皆泣いていた。

そして別れを告げて家を出た。

まだ一人別れを告げて居ない人が居る。

友希那ちゃんだ、俺は友希那ちゃんの歌の練習をして別れを告げた。

やはり泣いた。

別れとはこれほど辛いものだ俺は今日初めて知った。

こうして俺は、この思い出の場所を、思い出の街をでていった。

次回バンドリの世界にて俺は生きる第2章

「再会」

第2章

第五話 「再会」

ガタンゴトンと電車の音が聞こえる。

「ん〜」と俺は背伸びをする。

俺は外を見ると、「お、そろそろ着くか」と立ち上がる。

そう俺は戻ってきたのだ、思い出の街。

ガールズバンドの聖地へ。

あれから数年後、俺は親戚の人達のお陰で、学校に通えるまでになって居た。

だが本当の学年より一つ下の高二だ、最低俺が出来るのがそこだったからでもある。

そんな事を考えて居ると、「まもなく〜」

とアナウンスが流れる。

すると電車のドアが開いた。

「さあ返って来たぞ……………」

「我が家へ」

あれから何年経っただろう。

私たちが今バントをやって居る、

理由を作ってくれた、あの人は、今何処で… 何をして居るのだろうか。

あれから何年経っただろう。

私が仲間たちとバントをやって居る、理由、

私が歌う理由を後押ししてくれた、あの人は、今何処で、何をして居るのだろうか。

「もう春か〜」と、春の訪れを感じる

俺は葛木真也は、ここ「港島市」に返って来た。

「あいつらは今頃何やってるだろうな……」

俺は生まれ変わったことも忘れ、一つの世界、一つの人生として今を生きて居る。

俺が数年前に別れを告げた彼女達はどうなってるだろう。

そんな事を思いながら、懐かしい帰路をたどる。

「そういうえば、学校は明日からだったな。」

と俺は思い出す。

「この街には嫌な思い出もあるけどそれ以上に楽しい思い出がある」
そんなくさい言葉を言いながら、俺は懐かしの家に戻る。

「……そうだ。」

俺はある事を思い出したかのように、

スマホを取り出し電話帳を見る。

そこには、「宇田川巴」があった。

「よし、驚くかね」と思っ居ると、

「はいもし宇田川です」と少し凛々しい、

女性の声が聞こえる。

「……ただいま」それだけをいうと、俺は電話を切った。

さあどう反応するかな？

と、俺は柄にもなくウキウキして居た。

「さあ……」

「今日は宴だ！」と俺は懐かしの家の玄関を鍵で開け玄関くぐり入って行く。

—————

「え？」私は驚きを隠せなかった、

たしかにあの声は懐かしい、遠い昔良く聞いて居た声だ。

「しかもただいまって……」

そう考えると一つの答えにたどり着く。

「?!まさかー」

と私はすぐにラインでみんなに知らせる。
そして、懐かしいあの家に走る。

同時刻、蘭、モカ、つぐみ、ひまり、

「?!?!?!」

突然巴から来たラインを見ると、

「真也兄ちゃんが帰って来たかも知れない！」と送られてきた。

丁度私達4人は一緒にいたので、

「モ、モカこれって…!」

と聞くと、モカも驚いた表情で、

「多分そうだと思う〜」といった

つぐみもひまりも、驚いて居た。

そして私達は「行こう!」と、言っただ走り出した。

同時刻、葛木家

「会うのはもう二年ぶりか…!」

食材の買い出しから帰って来た俺は

ボソツと呟く。ベットに横たわって懐かしい風景を思い出す。

「よく蘭達に抱きつかれたな〜」と思い出して居た。

だが不安なことが一つある。

それは俺を忘れていないか、

もう一つはあつて拒絶されないかだ。

そんな不安を抱えて悩んでいると、

ガラガラ!

とドアが勢いよく開く音が聞こえる。

そして懐かしいドタドタという音。

そして部屋になだれ込んできたのは、

「へ?」見知らぬ美少女達だった。

「あ、あの君達は?」と聞くと、

前髪の一部が赤い少女が抱きついて来た。

内心混乱していたが、俺はすぐに理解した。

この美少女達こそ、蘭が達なのだと思つた。

「蘭?モカ?巴?つぐみ?ひまり?」と全員の名前をいうと、顔を上げ

て、

「「「お帰り真也兄ちゃん！」「」」

と言ってきた。

俺は涙を我慢する事が出来なかった。

俺はこの日を待っていた。

またみんなで笑える日々を。

「ああ、ただま皆んなー！」

こうして俺のまた新しい日常が、

俺に訪れた。

それでも俺は迷わない。

もう誰も泣かせないとそう硬く誓った。

次回「転校」

第六話 「転校」

ふと思い出すと探してしまう。

あの人を、もうこの街には居ないのに。

二年前突然別れを告げたあの方は、最後に
こう言っていた。

「俺が居なくなってもちゃんとやるんだぞ？」

せつかくの声が無駄になるからな！」

私は嬉しかった。

あの方の言葉が、声が、全てが、

私に光をくれた。

—————

「うーん」

と俺は背伸びをする。

「あつ、そういえば帰って来たんだった……」

そう俺はボソツと呟く。

昨日は久々に蘭達と会い、宴をした。

正直宴と言うよりかは、お帰りの会的な奴になってしまった。

「さくてと、そんじや学校行きますか。」

今日から俺が通う学校は、羽丘高等学校だ。

元々、女子高だったのだが、今年から共学になったらしい。

「どんな思いつきだよ(？▽？)」

そう思っ居ると。

ピンポンとインターホンが鳴る。

「そういえば蘭に学校までの道教えてもらうんだっけ」そんな事を呟
きながら、

学校へのしたくを済ませて、外に出る。

そこには、ショートで揃えられた髪の一部には、まるで稲妻のよう
に赤いメツシユを入れている少女、蘭が居た。

「よっ」と声をかける。

「ん、遅い」と蘭は不機嫌そうに言う。

まあ実際遅いしな。

「悪いな待たせて」と俺は謝りながら、
蘭の頭を撫でる。

昔からのごめんなさいのやり方だ。

「っ！／＼／＼／＼／＼」いきなり蘭の顔が赤くなる。

「あつ済まんいやだったか？」と聞く。

まあ久し振りにやられるから嫌がるのも、

そりやそうk「ううん、むしろ逆っていうか……
／＼／＼／＼」そんな
に顔赤らめんで下さい。

こつちが恥ずかしくなります。

なんてやって居る内に、学校に着いた。

「ほえく中々でかいのな」と俺が言うと、

「？コレがふつうじゃないの？」と、蘭が、不思議そうに聞いてくる。

「まあこれが普通なんだろうけど、俺が居た学校は、結構小さかったか
らな。」

と、言う。「あつ、ごつ、ごめん」と謝ってくる。きつとあの事を
未だ根に持って居るのだろう。「ま、気にすんな。昔の事だ。俺は、今
に向き合うって決めたからな……」

そんなくさい事を言ってる、

蘭が「あ、私コツチだから」

と言って去っていく。

「でも相変わらず別れ際寂しそうな顔辞めてくれよな」と俺は蘭を見
送る。

俺は踵を返し、職員室へ向かう。

「すいません、今日から転校して来た葛木です。」そういうと、奥の方
から先生が来て、

「おう、お前が葛木か、俺はお前の担任の佐々木だ」と挨拶をして来る。

俺も一応挨拶をしておいた。

「早速だが教室に行くぞー」と言ってる先生は廊下をら歩いていく。

「お前らく席につけー」と、先生が言う。

ガタガタつと生徒達が席に座る。

「そんじや今から転校生を紹介するぞー」

先生が俺の事を言うと言った皆んなコッチを見て来る。(皆んな済まんか俺はラノベのような転校生では無い)とは言うものちゃんとしとかなきゃな。虐められると困るし。

「今日からこの学校に通う事になった、

葛木真也です！よろしくお願いします！」

パチパチパチと皆んなが拍手してくれる。

「そんじやお前の席は……湊の隣だな」

と先生が言うと、男子の目線がさつきとは、比にならん位怖い。

まあそんな事を感じながら、席に着く。

(それにしても綺麗な銀髪だな)

そんな事を考えて居ると。

「私は湊友希那宜しく」と答えて来る。

「おう、俺は……知ってる」え？」

俺はさつき挨拶したからとかそんながんじでは無い、湊さんは俺の事を知っている。

しかも、湊さんが自己紹介した時、

さらに男子達の目線がヤバくなった。

「そんじやコレでHRを終わる、次は移動教室だから遅れんじやねーぞー」と言いながら、先生は去っていく。

「あの、湊さんなんで俺の事を知って居るの？」と聞くと、

「当たり前じゃない、だってあなたは……」

「私の歌を歌うきっかけと、その後押しをしてくれた人なのよ？」

と湊さんは微笑む。

「え？あつ」

俺はようやく思い出した。

一年前俺がこの街を出る日、蘭達以外にも

俺は伝えに行った人が居た。

「ま、まよか」

俺が驚いて居るのも気にせず、湊さんは俺に抱きついて来る。

「やっと思い出してくれたのね？」

「真也兄さん？」

そう彼女は俺と一緒に歌の練習をして居た、
湊友希那ちゃんだったのだ。

次回「ガールズバンド」

第七話 RoseliaとAfterglow

私に居場所なんか無いそんな事を思っ居た私に手を差し伸べてくれたのは、誰だろう？

彼が困って居る時に手を差し伸べられなかったのは誰だろう？

もう私は迷わない。

もう誰も泣かせやしない。

「ええええええええええ！ゆ、友希那ちゃん?!」嫌ね？よくよく見ればそんな感じはするけど、前から可愛いけど、え?!嫌可愛い通り越して美人やん、べっぴんさんやん!

「ん、友希那で良い……」俺に抱きついて来た友希那は、自分を名前で呼んで欲しいらしい。

「わ、分かったからチョット離れような?」

と俺は友希那を煽てる流石に男子の怒りの視線が凄い。

俺、明日殺されるかもね! (フラグ)

「しかも移動教室だからね?」

と言ってそのまま二限目三限目とやって行っただ。

放課後

「真也兄さん」と友希那が話しかけて来る。

「チョット付き合って貰いたいところがあるの」と言っってくる。

「分かった、後俺も兄さんなんて付けなくて良いよ、今は同じ学年なんだから」

と、友希那に言う。

「分かったわ……し、真也／＼／」

お?照れた珍しい。

とか思っ居ると、友希那が

「は、早く行きましよう／＼／」と急かす。

やっぱ照れてたやん。

(一応蘭達には連絡しとくか)

5:30 真也「済まん皆んな用事できた」

「ふう」連絡しとけば問い詰められる事は無いだろう。

そんなこんなで俺は、友希那について行く様にして、友希那が連れて行きたい場所に向かった。

「ここは？」と着くなり質問する。

「どこってライブハウスよ？練習する場所もあるから」と不思議そうに言ってくるが、

「いや俺が聞きたいのは、なんでライブハウスよに来たのかが知りた
いんだか？」

と、問いかけると、「そう言えば行ってなかったわね」と友希那は真剣に言う。

「私、いや正確に言うると私達はバンドを組んでいるの。」

いつもより一層真剣な顔で言う。

「ほく、そう言えば歌の練習をして居たのも

それだっけ理由？」と問いかける。

「ええそうよ今はRoseliaというバンドでやってるわ」と言う。

「で、俺にメンバーを紹介したいと。」

俺は友希那に質問する。

「そうよ真也ならギターなんかをやって居たから、バンドの実力の向上になると思って。」

「ほく分かった。一応顔合わせぐらいしとくか」

と言って居ると友希那が、「そういえば今日は、Afterglowって言うバンドと一緒に練習する予定よ」

「おう、分かった。？蘭達からのメッセージだ。」

6:00蘭「分かった私達も用事あったらか良いよ。じゃあまた明日お兄ちゃん」

6:01真也「おうまたな」

とラオンを閉じ、友希那と一緒に練習所に向かう。(RoseliaとAfterglowのバンドの人達ってどんな感じなんだろう。そうしている内に部屋に着く。

友希那がドアを開けると、「お、お〜」

と思わず声をあげてしまった。

ちやうど皆んな個人練習をして居たみたいだった。それにしても1人1人の迫力がが凄かった。「おつ友希那く遅かったじやん☆」

と見た目明らかギャルが友希那に話しかける。

「ん？今最後にお星様見えた気が……」

そして俺に気づいた様で「？そつちの人は？」と聞いてくる。

「ええ、こつちは今日から練習に参加してもらおうk「葛木真也だ宜しく」

と一応挨拶をする。

友希那さんや……挨拶ぐらい自分で出来ますよ？

すると綺麗な水色の髪をした人が、

「そう、貴女が……私は氷川紗夜よろしくお願ひしますえつと……」

「真也でもなんでも呼んでくれて構わないよ、氷川さん」

と氷川さんが困って居たので、俺は言う。

「そう分かったわ真也さん私は紗夜で構わないです」とさりげなく言う。

「おう宜しくな」

と次にきつきのギャルみたいな人が

「私は今井リサ、リサで良いよ」と言う

「分かったよりサ、俺も真也で良いよ」

と、言う「オツケー」とリサは答える。

すると次は少々戸惑っている人が

「わっ……私は……白金燐子です……宜しくお願ひします……」

真也さん」と、やっぱりオドオドしている。

すると最後に「私は宇田川あこ！宜しくね！真也兄！」と言うと

「おう！宜しく……ってえ！う、宇田川！」

と驚く。

「？そうだけど何？」とあこは言う。

「ま、まさか巴の妹!?」巴から妹が居るとは聞かされて居たが、まさかここに居たとは。

「あつ、そうか！真也兄がお姉ちゃんが言ってた人か！」と驚く。

「初めて見たよこんな人だったんだね、お姉ちゃん！」とあこが元気良

く言う。

「?なんで居ない巴の事を言ってるんだ?」

と言いながらあこが言った方向を向く。

「え?」俺はその場で硬直する。

え?なんでか?それは。

「紹介するは、この人達が私達と一緒に練習する、A f t e r g l o w
よ」

さらに驚きが拡大する。

そこには、なんと蘭達たちが居た。

「「「え?」」」

蘭達も驚いて居る。

「「「ええええええええ!」」」

そう友希那が言つて居たA f t e r g l o wの、

メンバーはなんと、蘭達だったのだ。

「なっなんで蘭達がここに?」

こうしていつのまにか俺は、ガールズバンドの中に引きずり込まれていくのをこの時の俺は未だ知らない。

次回「俺のギター」

第八話 「俺の音」

いつからだろう俺はギターを弾かなくなったのは、
いつかだろう俺が

何も感じなくなったのは……

俺はいつも皆んなの前では、

元気で前の皆んなのお兄ちゃん的な感じでやって居る。

だが本当は、何も、何も感じない。

あの時から胸にぽっかり空いた心の穴。

誰も埋められやしない。

誰も手を差し伸べてくれない。

ああこんな時に思い出してしまうのは何故だろう。

あの時の、楽しかったあと日々を。

親の死から1カ月後、俺は徐々に回復の兆しが見えて見えた。

いやそう見える様に感じさせた。

周りのみんなは、「良かったね」

「辛かったね」なんて言葉を投げかけてくるがそれは偽りに過ぎない。

だって俺は……

今日も今日とて朝が、やって来る。

俺の心も埋まることもなく、日常が過ぎていく。

アレから一週間俺は、RoseliaとAfterglowの練習
に付き合って居る。

元々Roseliaだけだったのだが、蘭達が

「私たちの練習にも付き合って！」

なんぞと言ってくるので、断るにも断り切れず、俺はAfterg

lowの練習にも付き合って居る。

「どれそろそろ行くか…… あっ」

俺は何かを思い出した様に押入れを漁る。

「あった…… ギター」

昔親父が趣味でやって居たギターを俺にも叩き込まれたのを俺は
覚えて居る。

だがあの時のから俺はギターを弾かなくなった。

だが昨日友希那に「真也のギターを聞かせてくれないかしら」と言われたのでこうやって、押入れから出している。

「…………… やっぱ出すんじゃないかった」

嫌な事思い出しちまったじゃないかよ。

そんな事を考えているがそんな時間はもう無い。

「もうすぐ約束の時間だな」

と支度をして家を出るそこには、蘭が居た。

「おはようお兄ちゃん」と、いつもの様に、おはようを言ってくる。

「おう！おはよう蘭」そう言っただけ俺は蘭の頭を撫でる。

「っ！／＼／＼／」相変わらず分かりやすいな。

そんな事を思いながら俺は蘭と一緒に練習所に向かう。

—————

何でだろう。

今まで気にして居なかったがふと思いつく。

あれから一週間が経った。

バンドの練習にもお兄ちゃんは付き合ってくれ。

けど、けどお兄ちゃんがたまに見せる。

光の無い目を見ると私は怖くなる。

お兄ちゃんがお兄ちゃんに無い人に見えてしまう。

そうだ、平気な訳が無い。

あんな出来事を一年で忘れられる人なんて

ほとんど………… いや、居ないでもお兄ちゃんは、ここに居る。

偽りの笑顔を持ってここに立っている。

そうだ、私が、私がお兄ちゃんのそばで、

お兄ちゃんを支えなくちゃ。

—————

俺と蘭がついた時には、紗夜と巴がもう、
スタジオに来ていた。

「おう、紗夜、巴今日は早いな」

と言うと巴が、

「いつも遅いのは真也兄さんだけだよ」
と苦笑いをする。

「アハハ確かにそうだな」

「そうやってまた誤魔化す。」

「そうやって俺は今日も一日を過ごす。」

蘭達に迷惑は、かけまいと、そう思って今日も偽りの気持ちを持つて過ごす。

「……………」

「皆んな揃ったわね」と友希那が皆に聞く。

「それじゃあ、真也約束どうり、貴方の

ギター……いえ、演奏を聴かせて頂戴。」

と友希那が言うと言った皆んなこつちを見てくる。

「はあく分かった」と言つて俺はギターの準備をする。

（久しぶりだけど大丈夫かな）そんな事を思いながらセットが完了する。

「それではお願い」友希那が言うと言った俺は、

ギターを弾きだし、そして歌い出す。

「♪〜」

「おうやっぱ真也兄のギターは凄いですな〜」とモカが、

「そうだねー昔と変わらな美味いよね〜」

とつぐみとひまりが言う。

「そうね、美味かったわ」と友希那が、

「そうだな、やっぱり落ち着くな」と、

巴が、それぞれの感想を言う。

だが何とも感じ無い褒められる事が嫌いなわけではない、ただ、嬉しいという感情が出て来ないのだ。

感情がないとは、中々不便だ。

だがそんな事を気づくものなど誰人いいない。

誰も俺の”本当のギター”を知らない。

次回「ポジティブ少女氷川日菜」

第九話 「ポジティブ少女氷川日菜」

誰か私を見つけて。

私の事を理解して。

私はここで苦しみ続ける。

お姉ちゃんが苦しむ様に。

「あゝダルい」

俺は不貞腐れながら机に突っ伏して居る。

それにしてもダルいなんてこう英語と社会の時だけこうだるくなんのかな？

そんな他愛もない事を考えているが今は

昼間すみ飯食わんとな

「じゃないとカ○爺に怒られてしまう」

そんなボケをして廊下に出ると、

「チョットどいてえ〜」と声が聞こえる。

「え？」なんて言っつてすぐ退かない俺が馬鹿だった。

「グハア」つと突撃してきた女子に当たり、

俺は倒れる。

「な、何が起きた？」と起き上がると。

「ゴメンね〜今急いでつてん？」

と今度は突然女子、略して突女子が俺の事を見てくる「な、なんだ？」と声をかけると、

「なんか君るん♪って来るね！」

とか言い始めたのである。

「はあ？」

と、俺は腑抜けた声を出してしまう。

そうこれが彼女氷川日菜との出会いだったのだ。

「な、なんだいきなり突然しといて、

るん♪って来るね！じゃねーよ誰なんだあんた一体」と俺は聴くと、

「ひ、日菜く待ってーって真也君?!」

アレくなんでここにリサがおるんや?

なんて思考回路を全力で回して居ると、

「へー真也君って言うんだ」

と日菜と呼ばれる子がこつちを向く。

(そういえばこの子なんか沙夜に似ている様な……………)

「私、氷川日菜!宜しくね真也君!」

(あつやっぱ紗夜の妹か。)

確かにこの学校に居るとは聞いていたがまさかこんな風に出会うとは。

「リサちー遅いよー」と氷川は言う。

「もう、日菜が早いんだって!」とリサが言う。

「あ、あのく氷川さん?ちよつとどいて貰えると良いのですg「日菜!」

といきなり叫ぶもんだからビックリした。

「な、何ダア?」とへんな風に聞いてしまう。

「私の事日菜って呼んで!」とせがんでくる。

どうしてこう美少女って奴は、下の名前を呼ばわれたがるんだか。

「そういえば日菜、オーディション行かなくて良いの?」とリサが言う。

「?オ、オーディション?」

俺が尋ねると。

「あ、ああああああ忘れてた!」

と思いつ出したかの様に急ごうとする。

だが、「あ、ラ○ン交換しとこー!」

となんともポジティブ。

イヤーポジティブって恐ろしい。

その後夜

ピコン♪

「ん?日菜か」

ラ○ンを確認すると、

8:00 日菜「オーディション受かったよー♪」
とやってくる。

8:03 「おう、おめつとさん」
と返事をする。

つてか結果出んの早くね？しかも受かんのかい

「真也さん何をしているのですが、今は練習の時間ですよ」と紗夜が
言ってくる。

やっぱり風紀委員会って怖いわー。

今日は、蘭達は居ない。

そろそろ一年生のテストらしいのだ。

だからこうして友希那達と練習をしている。

「い、いや〜ね？今日紗夜の妹に会ったんだよ」と、俺が誤魔化すと、
紗夜が、

「それがどうしたのですか？」と言ってくる。

流石に俺のメンタルもここままでか。

そんな事を思いながら日菜のオーディションの話をする。

だが、俺はこの話をした事に後悔する。

まさか、紗夜が日菜に対してコンプレックスを抱いて居るなんてな
い事を知らずに……

次回「紗夜と日菜の苦しみ、そして俺の意思」

第十話 「氷川姉妹の苦しみそして俺の意思」

ワー!!!と歓声が響く中俺はただただ走り続けた。

俺がやってしまった誤ちと紗夜と日菜の苦しみを解き放つために。

「い、いや〜ね? 今日紗夜の妹に会ったんだよ」と、俺が誤魔化すと、紗夜が、

「それがどうしたのですか?」と言ってくる。

流星に俺のメンタルもここままでか。

そんな事を思いながら日菜のオーディションの話をする。

だが、俺はこの話をした事に後悔する。

俺が話をしたしまった。

「そういえば日菜がアイドルオーディション受かったって言ってたぞ?」

と俺は話してしまった。

「っー」紗夜が固まる。

そして俺はやってしまった。

「あの子は、また私から奪うの? 私にはもうギターしか無いのに!」

そう言いながら部屋を飛び出してしまった。

皆んな唾然としていた。

俺だつてそうだ、紗夜があんな風に怒鳴ったところは初めて見たのだ。

「……行つて来なさい真也」と友希那が呟く。

「お、俺?」と聞くと

「当たり前でしょう紗夜を泣かせた挙句何処かにやったのは誰?」

「グフウ」それを言われると行かざるを得ない。

俺は紗夜を追いかけて行った。

アレからどれくらい走つただらう皆んなに心配させてしまう。

……でも戻りたくなかった、

「日菜がオーディション」それを聞いたら胸が痛くなった。

「どうして、どうして………!!」

「紗夜！」

「紗夜！」俺は紗夜に声をかける。

「？真也さん？」彼女の目の下は真っ赤だった。

相当泣いたのだろう。

「なあなんで日菜の話をしたら飛び出して行ったりなんかしたんだ？」

俺が聞くと紗夜は口を開いた。

「あの子は、天才なのよ」

「天才？」と俺は聞く。

「そう、人が苦勞してやっとやれるものを、日菜はすぐにできてしまう。」そう淡々と語る紗夜はとても悲しそうな目をしていた。

「私がどれだけ頑張ってもいつも二番、

そして日菜が一番だった。それを日菜は、

お姉ちゃん、お姉ちゃんって言ってくる」

紗夜の目からまた涙が流れてくる。

「だから日菜から距離を置いた。二人が平和に暮らせる様に」

と紗夜は話終えると、「さ、戻りましょう」という。

「……おい紗夜、それで良いのか？」

と思わず聞いてしまう。

人の心に踏み込んではいけない事を分かっていたはずなのに。

「良いって？貴方に何が分かるんですか！

私が長年味わって来た苦しみが分かるか？

そんな事を言うとも大概にしと「分かる！」

?!」

怒鳴っていた紗夜の話を守る様にして、

俺は言う。

「紗夜が苦しんでいることは分かった。

でもだからって、自分が苦しいのを妹のせいにしてするな！」と怒

鳴ってしまった。

「じゃあ、そんなに言うんだつたら示してください！」と紗夜も吹っ切れた様な感じで言ってくる。

「分かったそんなら明日見せてやるよ、

俺の覚悟を」

そうして俺は家に帰った。

だがその道中に日菜と会った。

「さっきの話どう言う事？」日菜にさっきの話を聞かれていた様だ。

「どうってそのままだが？」

というと、「私だつて分かってる！私がお姉ちゃんを傷付けてる事ぐらい分かってる！」

でもなんで真也君は、そこまでの?!」

日菜は自分の思いをぶつけてくる。

だが日菜にも「それが知りたければ、明日の

”アレ”を見にこれば分かるさ」と言つて立ち去った。

「アレ”つてなんの事だろう？」

真也君が立ち去ったあとわたしは家に帰つて考えた。

「そう言えば明日は確か……あ」

そうだ明日は花咲川学園とのバスケット試合だった。

「でも、真也君バスケット部に入って無かったよね？」

そんな疑問を抱えながらわたしは眠った。

「これから花咲川学園と羽丘高等学校の試合を始める！」

「」「よろしくお願いします」「」

「」「よろしくお願いします」「」

と審判が挨拶をさせるそして俺は今この体育館のフィードに立っている。

昨日俺はクラスのバスケット部の奴らに頼んで今日限り、俺はバスケット部になった。

俺は一応中学時代はバスケット部だったが高校に入ってからボール

すら触って居ない。

しかも、あまり期待はされていないだろう。

なんとたつて相手は花咲川学園だ県内屈指とも言われている高校だがそれに控えコッチは、

あまり勝てず下を這いずり回る、羽丘高等学校。負け確なのは目に見えている。

だが俺はここにいる。

約束を果たすために。

—————

「なぜ彼がここに居るの？」

私は未だに理解出来なかった。

彼は、部に入って無いと聞いたのだからきつとこれには出ないと思っていた。

でも多分……

「ここで覚悟を見せるというのですか」

—————

ただ今3 p今の状況は、78:57なんとも絶望的。

だが今年はなぜか皆んな気合が入っていた。

多分理由は……

「皆んなく頑張つて〜」そう学園の上位の美人達からの声援があるからだ。

だがそれでも状況は変わらない、俺は多少

バスケには触れていたが、やはり県内屈指だそう簡単に行くわけがない。

そんな事を考えて居ると。

ピー！つと笛がなる。

相手がまた決めた。

「終わったな」と中にはつぶやいているものもいる。

だが俺は諦めない。

そう思い走り出そうとするが、瘦けた。

バン！と盛大に。

そう相手の挑発だ。

ワハハハハハ！と周りから笑い声がする。

うちのバスケ部のメンタルはもうスタボロだ

「可愛そうにねえ〜こんな無様にやられるんだったら頑張らなくて
も良いんじゃない〜？」なんて言われる。

すると蘭が怒りかけた。

ヤバイ、こうなったら今しかないか

「黙れ!!!」俺は叫んだ。

会場が静かになるが、コレなら話しやすい。

「あ？なんだ？俺たちとまだ遣り合おうつての？才能も無いくせに
よ！」と相手の副キャプテンが言う。

だがここで言わなければ日菜にも紗夜にも伝わらない。

「ああ当たり前だ！」

俺は心の声をぶちまける。

「そもそも勝てない相手だと分かっている、

鼻から期待されてない事なんかわかってんだ!!」

「どれだけ頑張っても才能があるものには追いつけない事なんて分
かっている！それでも、それでも！ここで諦めて負けを認めたらそれ
こそ！人生最大恥だ！」

「しかもお前は、自分は才能があるから練習なんてしなくて良いなん
で思っていないか？それは大馬鹿ものだ！いくら才能があるからと
いって、才能があるものが練習して手に入れた物と、才能があるもの
が練習しないで手に入れものは違う！他の奴らもそうだ！努力をし
ている天才は、陰ながら努力しているんだ！それをお前達はなぜ見よ
うとしない！」

俺が話をしているときは誰も声をあげなかった。ただただ静かに
聞いていた。

「期待されてないことは分かっているでも、

それでも！」

俺は力を振り絞って答えた。

紗夜と日菜に伝わるように。

「俺は！勝てる勝てないじゃなく！俺はお前達に立ち向かわなきや駄目なんだ！」

「どれだけ頑張っても才能があるものには追いつけない事なんて分かっている！それでも、それでも！ここで諦めて負けを認めたらそれこそ！人生最大恥だ！」

それを聞いてのは初めてだった。

そうだ私は自分から逃げていた。

日菜からなんかじやない自分から逃げていたのだ。

それを気づかせてくれたのは、彼

葛木真也。

「本当に参ったわね……」

「努力をしている天才は、

陰ながら努力しているんだ！それをお前達はなぜ見ようとしなない！」

その言葉は私が待っていたものだった。

私を見てくれている人は居た。

昔から、私は見たものを全て出来る完璧少女、周りから見たらそうだった。

でも実際は違う。

私は、見ただけでは何も出来ない。

影ながら頑張り、やっとコツを掴む、それで精一杯だった。

けれども、誰からも自分の努力を見てもらえなかった。

それを彼は見ていてくれたのだ。

「全くやっぱり真也君は、るん♪ってくる

くらい参っちゃうな」

そこからの4pはすごかった。

俺の言葉に火がついたのか。

どんどん点差は縮まって行った。

ただ今80:79皆んなの感性もなくなりピリツとした状況になっていた。

残り時間は5秒それまでは必至の攻防戦だったが俺はそのチャンスを見逃さなかった。

「はいー」仲間にはパスを要求する。

俺に気づいた仲間が、俺にパスを回すが副キャプテンがそこに立ちはだかる。

だがもう迷わない俺は高く飛んだ。

「させるかああああああー！」

ブロックしてくるが俺は迷わずダンクをする

「行っけええええええええ」

チームの音が聞こえるだが押し負けそうになる。

「頑張れー」「蘭達や

日菜、そして紗夜、友希那達の声が聞こえる。

「ここで決めなきゃ男じゃねえよー」

俺はリングにボールをたた着付ける。

ピー!!

「試合終了！80:81で羽丘高等学校の勝ち！」

「勝った……やったああああああー！」

こんなに叫んだのは久々だった。

皆んながこちらに駆け寄ってくる。

そして紗夜と日菜に思いは伝わったのか？

そんな事を考えていると視界が揺れる。

「な、なんだ……コレ？」

その瞬間俺は意識を失った。

次回「仲直りの氷川姉妹と葛木真也」

第十一話 「仲直りの氷川姉妹と葛木真也」

「……や、……しんーや、

ー真也!」と、耳元で大きな声で叫ばれる。

「うるせー!痛っ!」怒鳴ると同時に痛みが走る。

「あつ、ゴメン。大丈夫?」

よくよく見ると、蘭だった。

「お、おう蘭だったか済まん済まん」

そう言いつつ俺は起き上がる。

「そう言えば俺は……」

今までの、事を振り返っていると

「お兄ちゃんがいきなり倒れたからビックリしたよ、あんまり無理しないですよ!」と、蘭が泣きそうな感じで言ってくる。

(何でこんなに可愛いん?それはそうと、時間は……)

「え?8:30?」と腑抜けた声で言う。

「そうだよアレから二時間位寝てたから。」

相当疲れを感じているだろう俺の体を動かす。

ガラガラ、とドアの方から聞こえて来る。

「ん?ああ紗夜と日菜か」

そこにいたのは紗夜と日菜だった。

その状況を察した蘭は、「外で待ってるから」

と言つて外に出て行った。

(我ながらよく出来たものだ。今度なんかしてやらんとな)

「真也さん」「真也君」と、いきなり二人が話しかけて来る。

「は、はいなんでしょう?」

俺が振り向くと何故か凄いオーラを放つ二人だった。

(見れば分かるヤツベエ奴やん(・▽・))

「ありがとうございます」

以外な言葉だった。

「ふえ?」てつきり俺は怒られるものだと思っていた。

「貴方のおかげで、日菜と仲直りする事が出来ました、ありがとうございます」

います」

と、紗夜が頭を下げて来る。

「い、良いよ別、俺はただ二人は一緒に笑っていた方が良いと思っただけであって俺の勝手な行動だったから紗夜が気にする事ないだろう？」

と俺が言うと、紗夜は頭を上げた。

「そうですね…… 日菜も御礼を言いなさい」

と日菜を急かす。

「……………」日菜が固まっている。

「?どうしました日菜?」紗夜が話かけると、「えええええん!」と日菜は泣き出してしまった。

「え?な、なんで泣くの日菜?」明らかに紗夜が戸惑って居る。

(ま、日菜の気持ちもわからんでも無いがな)

そう思いつつ俺は日菜に話かける。

一応抱き寄せて来る。

「!」二人して驚く。

「紗夜チョット我慢しといてな」

と何か言いたそうな紗夜を止めておく。

「日菜?」と問いかけると。

グスン、と少し泣いて居るが「何?」と答えてくれる。

「嬉しかったんだもん、紗夜と仲直り出来て」

俺が聞くと「うん」と答えてくれた。

「紗夜、日菜はずっと紗夜と同じ苦しみを、感じて居たんだ。どれだけ頑張っても、天才だから当たり前だと思われていてどれだけ努力しても、そこをだれにも見てももらえず、

一人孤独だった」

俺が日菜の感じていた事を話すと紗夜は、

「そんな……」と、驚いていた。

「で、もそれでも、日菜は頑張っていた、

紗夜を追いかけて色々な事をやって居たんだ。だからさ、紗夜」

俺は日菜の気持ちも自分の気持ちも載せていった。

「今まで苦しんでいたのは紗夜だけじゃなく日菜も苦しんで居たんだ。だから今まで避けて居た紗夜が仲直りしたと言ってたくれた事が嬉しかったんだよ、日菜は」

「そう言っただけで日菜を離すと。」

「日菜はすぐに紗夜に抱きついた。」

「お姉ちゃん、ゴメンなさい、今まで私、」

「お姉ちゃんの事ずっと……。」と日菜は泣きじゃくりながら言う。

「大丈夫よ日菜、私だって、ずっと日菜の事を、私は……。」その日始めて二人で抱き合い泣いた。

紗夜と日菜は無事仲直り出来たようだ。

「さあ、時間も遅いし帰るか、蘭も待たせてるし。」そうして俺たちは、校門前まで行った。

「あ、お兄ちゃん遅い！」と蘭は怒っていた。

「済まん済まんって巴達まで居たのか？」

「そこには、巴達と、友希那が居た。」

「大切な仲間と、幼馴染が居るつてのに、帰る訳ないだろ」と、巴が言う。

「…… そうだな、皆んな帰るか」

と俺たちは帰路を辿る。

「さて明日はどんな1日になるかな」

何て考えている俺だったが、次の日俺はとんでもない事に巻き込まれる事を俺はまだ知らない。

—————

俺、葛木真也 16歳

高校二年生！

前の人生では、高校三年生！

好きな事は、音楽を聴く事、漫画と小説を読むこと！

彼女居ない！募集中！

何て事頭の中で回想していると、

腹に物凄い衝撃が走った。

「痛った！」

俺は衝撃で起き上がる。

「あ、起きた！おはよ、真也君♪今日も
るん♪とする1日を過ごそう！」

蘭かと、思ったが日菜だった。

「あら、真也さん起きたのですね」ついでに
紗夜も居た。

「お、お前ら……」

「部屋から出てけー!!!」

事後蘭と友希那も来て修羅場になったのは、また別の話

てかなんで友希那と紗夜と日菜が俺ん家知ってんの？

そんな事を考えながら俺の一日は、こうして悩む事から始まった。
全くこの人生、生きてて飽きないよなあ。

次回美竹蘭編

第一話「可愛い幼馴染」

過去編

第十二話

葛木真也の過去

前編

突然で済まないが、読者のみんな、少し俺の昔話を聞いてくれないか？

ま、作者に話してくれって言われたから、話すんだけどw
時は遡り俺が蘭達と、再開する少し前、確かアレは……………

半年前

「ん、ふあ〜」

と、いつものように起床する俺、葛木真也は半年後に高二になる。
まあ、元々俺は三年の筈なんだが、一度留年した身だから一年下がったから何も言えないんだけどね☆

親父の死から約一年半家の人たちなどにより、俺の心のケアは、順調に進んで居た。

だが、少し困った事が有る。

「お〜い、真也君〜」

と、噂をすればのタイミングで俺の悩みの種が来る。

「何だ、ノックぐらいせいや、この戯け」

「え！戯けて酷くない☒前はもうちよい優しかったよね？（＊、

3、）」

と、こんな他愛も無い話をしているこいつこそが、悩みの種

白鷺洗夜（しらすきこうや）だ、まあ、世に言う陽キャだなうん（
〜、〜）。

話は戻るが、コイツはいわゆる不良だ。

しかも、番長と来た。

え？何で不良なんかと一緒に話しているかだつて？知るかよそんなもん。

俺の親父が死んだから転校して来た、なんて言われたら誰も近寄ろ

うとしないだろ？

しかも中三の終わり頃にだ。

普通、それはお気の毒にとか、そんな接し方しかして来ない中で、唯一俺に話しかけてくれた奴、それが白鷺洗夜だった。

最初は、白鷺が不良だと聞いていたので、少し警戒していたのだが、話してみると、結構良いやつ奴って事が分かった。

「んで、今日は何のご用件で？」

と、ベッドから起き上がりながら白鷺に言う。

「どんなって、そりやお前、学校に行くんだろうが」

と、何言っつてんだコイツみたいな感じで言っってくる。

「学校に行くとか言っつていて、HRに出席すらしらない奴が何を抜かすか」

と、すかさずツッコミを入れる。

「まあまあ、そう気にしなさんな」と、軽く返事をする。

「はあ、わかったから先下に行つていてくれないか？」と、白鷺に言う。

「ん？ああ良いぜ、先外で待ってるからな」

とか言いながら白鷺は出て行つた。

「ふう、何だかアイツと話してると、蘭達を思い出すな」

思わず呟く。

突然だが、最近覚えた事は、喧嘩の仕方、

拳の振り方、力の入れ方など、色々喧嘩の事については、色々教えてもらった。

「…………でも、そろそろアイツにも話とか無いとな…………」そう言いつつ俺は部屋を出る。

部屋の机の上には、「引越し届け」と、

「転校届け」と、書いてある物が乗っていた。

「よ、悪りい白鷺少し遅れた」と、白鷺に謝る。

「まあそこら辺は良いとして真也、そろそろ俺の事名前前で呼んでくれね？」と、要望をして来る。

「ん？まあ減るもんでもねえしな……気が向いたら呼ぶよ」と、軽く返した。

「あ、後放課後話あるから」と、言っただけで俺と白鷺……いや洗夜は別れた。

次回「真也の過去」後編

第十三話

葛木真也の過去

後編

放課後、俺は洗夜に話があった。

勿論引越すと、転校の話だ、何て言ったらいいかずと悩んで居ると、洗夜が入って来た。

「よ、遅くなつたな」と、チャラらけた感じで謝って来る。

「そうだな、一発殺らないと気が済まないなw」と、冗談交じりに言う。

「ちよwそれは酷いだろw」なんて洗夜も、反応してくれる。

「ま、それはそうとしてだ、話って何だ？」

と、真面目な顔で言ってくる。

「チツ、何でお前はこう、察しが良いのかね、感の良い子は嫌いだよ」と、言いながら洗夜の隣に座る。

「実はな、俺、転校する事になった」俺は、洗夜に転校の事を伝えた。

「っ！そうか、そうか、そうなんだな真也」

と、前から分かっていたかのように言う。

「何だ？もうちょいリアクション取ってもらわないと真也君悲しいですよ？」

「あ、悪りい悪りい、実はさ、朝お前の部屋に行った時に、机の上に転校届けあんの見つけちゃまってよ」と、今朝の事を洗夜は、言ってきた。

「そうだったんだな...」少し俯いてしまう。

「それでな、真也、少し頼みがあるんだ」と、洗夜から珍しく頼み事があった。

洗夜は立ち上がり俺の前で拳を突き出して来た。

「葛木真也、今からお前にタイマンしてもらおう」と、以外な頼みが帰ってきた。

「..... 良いんだな？」と、洗夜の意味を理解して、確認を取る。

「ああ、コレが俺の決意だ」いつもの洗夜なら、少しふざけた感じを醸し出しているが、今は違った。

何処の誰にも負けないぐらいの真つ直ぐな目をしていた。

「分かった、そのタイマン受けさせてもらう」そう言いながら俺は顔の前に拳を持って来る。

「……： ありがとな真也、俺の我儘聞かせちまってよ」と、謝って来る。

「馬鹿が、コレは男のタイマンだ、我儘もクソもあるかボケ」と、洗夜に返す。

「はは、それもそうか」と言いながら拳を顔の前に持って来る。

「いくぞ！洗夜（真也）！」

—————

そこからは、両者互角だった。

食らっては、食らわせ、食らっては、食らわせたの繰り返し、いつしか二人共倒れていた。

「はあ…… はあ…… はあ…… 結構やる様にやったじゃねえか、お前」と、洗夜が言ってくる。

「ま、まあな、伊達にお前の練習付き合ってた訳じゃねえよ」と返す。

「色々な事があつたなあ」

「そうだな」

なんて他愛も無い話をする。

「なあ真也」

「ん？何だ？」

また、洗夜が話掛けてくる。

「俺とお前が合った時の事、覚えているか？」

「ああアレは酷かったな」

二人で昔の余韻にも浸った、思い出話しをした。

「まだ、合って少ししか経ってないってのに、よく俺らこんなに仲良くなつたよな」

「ああ、確かに、そうかもしれないな」

そろそろ日が沈んでくる時間になった時だった。

「でもさ、俺真也に会えて良かったと思うんだ」

「何でだよ」

「あん時さ、俺一人だったんだ、仲間にも裏切られて、ダチにも裏切られて、本当、最悪だったんだよなあ」と、昔話を洗夜がしてくる。

「でも、そんな時お前が転校して来て、チョット釜掛ける位の感じで

行ったんだけどな、すぐ仲良くなっちゃった」

「でも案外悪く無かっただろ？」

なんて、洗夜に聞く。

「ああ、お前だってそうだろ？」

「そうだな、本当良かったよ」

段々と日が沈んで来る。

「そろそろお別れだな」と、呟く。

「いや、案外またどつかで会うかもなw」なんて洗夜が言ってくる。

「俺さ、親の反対押し切ってこの街に来たんだ。妹も居ただけどな、そいつに、何も言わず出て来ちまってよ、でもアイツ今東京に居るらしいんだ」と、言ってきた。

「ほう、それでその妹さんにあうかも知れないから…そう言う事かと、理解する。

「そゆこと、それじゃまたな、真也」そう言って手を差し出して来る。「ああ、でもさよならは言わないぜ？」と言って手を出し握手する。

そして最後にありったけの感謝を込めてこう言った、「また何処かで会おうぜ、洗夜」

洗夜は驚いた顔をしていたが、すぐに笑って「おう！また何処かで会おうぜ真也！」

こうして俺らは別れた。

また何処かで会うという願いを背負って

番外ストーリーー過去編

終

次回「再開、不良番長☒」

美竹蘭編

第一& a m p ; 二話 「可愛い幼馴染」 「蘭とデート」

「ふあああ」

いつもの様に朝が来た。

そしていつもの様に、

「ん、起きた？お兄ちゃん？」

ベッドの中に蘭が潜り込んでいる。

「いや、何で蘭が俺のベッドの中に入ってるんだ？」

と聞くと蘭がキョトンとした顔で

「何でって、お兄ちゃんの寝顔見てたら私も眠くなってそれから……」

何かを言いかけ用とした蘭が止まった。

「それから？」と俺は問いかけると

「／／／／／」あら、顔真っ赤にしてどうしたのかと思いきや、すぐさま立ち上がりドアの方へ向かって行った。

「さ、先外で待ってるから／／／」と言いながら出て行った。

(最近蘭って自分で地雷踏んでる気がするんだが……) そんな事考えながら身支度を済ませる。

ガチャッと玄関の鍵を閉める。

「済まん遅くなった」

「ん、行くお兄ちゃん」

と、言いながら先を歩く蘭。

(そろそろ真也だけでも良い気が)

そんな事を考えていると、蘭が

「そういえば、さ、今週の土日、どっちか空いてる？」といきなりの質問。

「ん？まあ別土日はヒマだがそれがどうした蘭？」と質問をすると意外な返事が帰ってきた。

「お兄ちゃん、こ、今度ア、アタシと、

デ：「何か言いたそうな蘭に俺は問いかける。

「デ？」そうすると蘭は顔を赤くして

「デートに、行かない？／＼／＼／」

と蘭からのデートの誘いを受けるのであった

一つ俺が思った事を言うぞ

「何？この可愛すぎる生き物？」

第二話「蘭とデート」

「悪い待ったか？」

と、少し時間に遅れてしまったので謝罪する。

「ん、大丈夫今来たところ」とは言うものの、少し不満気な顔をしている。

「そうか、んじや行くか」

そう言いつつさりげなく手を繋ぐ。

「ちよ、何やって／＼／」

物凄く慌てる蘭を少し弄ってみる事にした。

「んじや離すか？人混みで逸れない様にと思っただが、蘭が嫌なら仕方ない」

と言いながら、手を離そうとするが、

離さない。

不思議に思っ手を見ると蘭が俺の手を握っていた。

「？どうした蘭？」

と、少し意地悪を試してみた。

「……と……つ……い」何か言っているが聞こえない。

「ん？何だって？」と聞くと、

「お、お兄ちゃんと手繋ぎたい！／＼／」

と、顔を真っ赤にしてくる。

やはり可愛い。

「そう言えば蘭」俺は蘭に一つ提案をする。

「ん？何？」蘭は不思議そうに首を傾げる。

「そろそろ俺の事普通に真也って呼んでも良いんじやないか？」

そんな提案をすると蘭は「……」と少し考えていた。少しすると、「ううん、このままでいい」と答えたので「そうか」とだけ答えた。「それはそうと蘭よ今日は何処に行くんだ？」と行き先を聞いていなかったなので尋ねる。

「?言つてなかった?今日は動物園に行くんだけど?」

「ほえ〜」思わず声を漏らす。

しばらく動物園に行つて無かったが、ここまで変わつているとは思わなかった。

「さ、行こ真也お兄ちゃん」

と、蘭が目を輝かせながら、俺の手を引っ張る。そこからは凄かった。

俺は動物で大分凶暴な動物でも大丈夫なんだが、蘭がとにかく怖がついていて、正直可愛かった。

そんなこんなで動物園にを回っていると、「少し休憩しう蘭俺疲れた」

と言うと蘭は椅子に座つて息を吐いていた。「流石に疲れたな」と言うと

「そうだね、飲み物がほしいね」と蘭が言ってくるので、

「チョット待つてろ飲み物買つてくる」と言つて、自販機の所まで行つた。

数分後

「おい蘭待つたよ「離して!」!」

と蘭の叫び声があると、そこにはチンピラに絡まれている蘭がいた。

「蘭!」

と俺は叫んで蘭の元に走る。

「……悪いことしちゃったかな？」

真也お兄ちゃんは、優しいからすぐに飲み物を買いに行ってくれた。

それにしても今日は物凄く楽しい。

普段学年違いで余り学校では一緒に居れ無いけど、今はお兄ちゃんといっしょに居れる、

それが楽しかった。

「ねえ、その可愛い子ちゃんちょっと俺と遊ばない？」

突然男の人が話しかけて来た。

「い、いえ私は連れがいるのd「良いじゃんか、それぐらいほらほら行こうぜ？」！」

突然手を引かれたのでびっくりした。

「離して！」と声を上げるが誰も私に気付かない。

(助けて、真もお兄ちゃん！)

「蘭！」

「蘭！」

声を掛けると蘭が「真もお兄ちゃん！」

と叫んでくるがその手はチンピラに掴まれている。

「あ？何だテメエ？」とチンピラは怒った様に威嚇してくる。

「お前、俺の連れに何してんだ？」

と、問いかけると、「こいつか？見れば分かるだろ？ナンパだよ」

と言ってくるのでイラツとして、

蘭の手からチンピラの手を離させた。

「蘭！少し遠くまで逃げとけ！俺は後で追いかける！」と、言うが蘭は戸惑っている。

「あ?!何だテメエ?!殴られてえのか！」

とまた威嚇してくるので俺は怒鳴る。

「オメエ俺の女に手え出してただで済むと思うなよ！」

と威嚇すると、チンピラは、拳を振りかざして来る。

「ふん、これじゃ当たらん」と避けようと思ったが、後ろを見ると蘭が居て避けるのをやめた。

ドガつと顔に凄い衝撃と視界が赤くなる。

(顔面に一発貫つちまった)

と考えていると。周りに人が集まって来て。

「アレ？あの人頭から血流れて無い？」

と誰が言っているとチンピラは、焦って帰って行った。

「ふう、大丈夫か？」蘭の安全確認をしようと思ったら、蘭が抱きついて来た。

蘭の体は微かに震えている。

「……怖い思い、させちまったな」

と謝ると、蘭は「うあああああん！」

と泣き出してしまった。

だが俺は蘭を離さずしばらく抱きしめていた。

—————

「蘭ー」と叫び声がある方向を向くと

そこにはお兄ちゃんが居た。

「真もお兄ちゃんー」と安心して叫んでしまう。

すると男の人が「あ？何だテメエ？」

とお兄ちゃんを威嚇する。

だがお兄ちゃんは一步も引かず、

「お前、俺の連れに何してんだ？」

と言ってくれた。

すると男の人は、「こいつか？見れば分かるだろ？ナンパだよ」

と言う。

だがその手はお兄ちゃんが離してくれた。

「蘭！少し遠くまで逃げとけ！俺は後で追いかける！」と、お兄ちゃん
は、言ってくれるが足がすくんで動かない。

「あ?!何だテメエ?!殴られてえのか!」

とまた男の人が威嚇する。

するとお兄ちゃんが、「オメエ俺の女に手え出してただで済むと思

うなよ！」と言ってくれた。

嬉しかった。

ちゃんと守ってくれてるんだと安心した。

すると威嚇すると、チンピラは、拳を振りかざして来る。

「ふん、これじゃ当たらん」と言いかけた

お兄ちゃんが止まる。

その拳の先に私が居たのだ。

そしてお兄ちゃんが顔に拳を食らう。

お兄ちゃんがよろけると、周りに人が集まって来て「あの人頭から

血流れて無い？」

と話し声が聞こえると、男の人が去って行った。

「ふう、大丈夫か」と言う前に私はお兄ちゃんに抱きつく。

するとお兄ちゃんは、「……怖い思い、させちまったな」と誤って

来る。

「うああああん！」と泣き出してしまった。

でもお兄ちゃんは抱きしめてくれた。

怖かったそして嬉しかった。

その気持ちで胸がいっぱいになった。

第三話 事件の後

「痛って」俺は殴られた場所を触りながら言う。

「ダメだよ真也お兄ちゃん、まだ傷痛むんでしょ？」と、蘭は心配そうな顔で言ってくる。

「まあな、そういえば蘭そろそろ閉園時間だけど、最後に行きたい場所有るか？」

と蘭に聞くと、「ん〜観覧車？」

と答える。

「何で疑問系なんだよ」

と思わず突っ込んでしまった。

「まあいいでしょ、さ、行こ真也お兄ちゃん」と言いつつ俺の手を引っ張る。

(?何か蘭の奴機嫌良くないか?)

と疑問を抱えながら俺たちは観覧車のある方へ向かった。

「……………」二人の間に会話は無かった。

ただ外を見て居るだけ。

そんな空間を破ったのが蘭だった。

「そ、その今日は助けてくれてありがとう」

と、お礼を言われる。

「別良いよ、俺にとって当たり前の行為をしたんだ」だが俺の中には靄があった。

最初チンピラに手を掴まれている蘭を見て少し胸が締め付けられた。

あんなにも心が痛くなったのは、親父達が死んで以来だ。

何でこうも蘭の事を意識してしまうんだろう。

何でこうも蘭が綺麗に見えるのだろう。

—————

そろそろ観覧車が終わる。

その間は、色々話した。

バンドの事、他のバンドの事を聞いた。

「なあ蘭」と蘭に問いかける。

「ん？何真也お兄ちゃん？」

と、いつもの様に聞いてくる。

「……お前、巴達と違うクラスなんだってな」

「っ！」蘭に反応があった。

別に意地悪しなかった訳では無かったが、

自然とその質問が出た。

「……悲しかったか？」と聞く。

蘭の方を見ると、涙を流していた。

「うん、私皆んなとずっと一緒だと思ってた。だけど違った。真也お兄ちゃんも離れていった、巴達とも違うクラスになった。そのクラスで私は浮いたの」

と淡々と話す蘭は、とても悲しそうだった。

だから俺は蘭を離さず抱きしめた。

「！／／／」蘭は突然な事に驚く。

「済まんな蘭、今日あんな目に合ったのに、

そんな前から苦しんでた事も知らずに悲しませちまったな。」

そして俺は言った。

「全部吐き出して良いんだ蘭」

すると蘭は泣きながら、今までの苦しみを俺にぶつけた。

そこから数分少し立ち止まったままだった。

「今日ありがとな蘭お陰で少しは疲れが取れたよ」と言うものの疲れは取れたが、

痛みが取れない事は隠した。

「真也お兄ちゃん、痛いのが我慢してるでしょ」あつさり心読まれた。

「……あんまり蘭に気使われたく無いんだよ」

と、視線を逸らす。

「でも、ありがと私を守ってくれて」

てつきり怒られるかと思っていたが、

何故か御礼を言われた。

「でも真也お兄ちゃん、痛いんでしょ、
一応傷見るから家に来て」と言われたが、
断ろうとした。

そう、断ろうとしたんだよ？

「うーちーにーきーてー！」

こんな押されたら行くしか無いだろ。

—————

「お、お邪魔しま〜す」

俺は恐る恐る蘭の家の中に入る。

（そう言えば蘭の家って花道の家元だったんだっけ。ヤツベ〜そう考
えたら緊張して来た）

「ただいま」と蘭が言うと、奥から懐かしい顔の人が出て来た。

蘭のお父さんだ。

「やあ真也君、三年ぶりかな？」

と挨拶してくる。

「はい、お久しぶりです」

と、一応挨拶をしておく。

「まずは、ありがとう真也君。今日は、

チンピラから、蘭を守ってくれたんだってね？」と聞かれる。

「え？何でそれを？」確かに守ったがその事は知らないはず。

しかも蘭もびっくりしていた。

「はっはっは！何で知っているかって？

それは近所の人から聞いたんだよ」

とあっさり答えられた。

「さ、上がってくれたまえ、蘭、真也の傷の手当てをする為に呼んだん
だろ？準備をしておいたから、手当てをして上げなさい」と、

蘭のお父さんがらんに言う。

「ありがとうお父さん、真也お兄ちゃん、

こっち来て」と蘭に案内される。

「おく久しぶりだな、蘭の部屋に入るの」

なんで懐かしみに浸っていると、蘭が救急箱を持ってきた。

「ほら、傷見せて」と触って来る。

「ちよ、ま、痛!」いきなり触られるもんだから痛かった、少しだけ。

「あ、痛かった? ゴメン」少しシユンとした顔を見せて来る。

「コレはズルい。」

「ま、少しだから大丈夫だ」

「そう言いつつ手当てをしてもらった。」

「じゃあ、また明日な」

と帰ろうとすると蘭が少しシユンとした。

「大丈夫だってまた会えるから、な?」

とあやして、俺は蘭の家を出た。

「ん? おく巴久しぶり」

帰り道巴に会ったのだが、今日の事を話すと、「はく、真也兄って本当鈍感にも程があると言うか……」

と、呆れられた。

「? 何の事だ?」と、巴に聞くと、

「別に気にしなくて良いよ」と、はぐらかされて巴と別れた。

一体何の話だったのだろう。

一方その頃真也と別れた巴は、蘭に電話していた。

「蘭く聞いたぞ今日の話、で? 何か進展あったか?」と、蘭に聞くと、

「ううん別に何も無かった」と帰ってくる。

「蘭さくそろそろ言った方が良いんじゃないか?」と、聞くと蘭に、「うるさい」と言われて電話を切られた。

「そんな事分かってる」

巴からの電話を切った私は、一人で呟く。

「自分でだって分かるよ……」

と少し沈黙を置いてまた口を開いた。

「言える訳無いじゃん」

「真也お兄ちゃんが好きだなんて」

次回「二人の思い」

第四話 「二人の思い」

アレから数日俺は怪我也徐々に治つて来た。
だが問題が一つある。

蘭という時だ。

何でか分からないが、蘭という時には、
緊張してしまう。

何故かって？そりや俺が聞きたいくらいだ。

蘭といると落ち着く、蘭といると胸が熱くなる、蘭が居ないと寂い。

そんな思考が頭の中を駆け巡っている。

そしてもう一つ問題がある。

それは蘭の反応だ。

最近目を見て話してくれない。

目を合わせて話そうとすると、目を逸らす。

それが悲しかった。

俺はその時気付いた。

俺は「蘭が好き」だと言う事に。

「この気持ち、伝えなきゃな」

そう言いつつ俺は玄関のドアを開けた。

最近真也お兄ちゃんと目を合わせて話せない。

何でかって？

そりや恥ずかしいから。

真也お兄ちゃんと話すと胸が熱くなる。

真也お兄ちゃんと居ると安心する。

真也お兄ちゃんが居ないと寂しい。

そんな思考が頭の中から離れない。

「そろそろ言わなきゃ」

そう決心して、私は家を出た。

学校

ガヤガヤと騒がしい教室、だがそんな事を気にせず、俺は蘭にどう向き合うかを考えている。

「やっぱ告るしかないのかなあ……」

そんな事をぼやいていると、先生が入ってきた。

(ま、放課後蘭に伝えんな……)

そんな不安を抱えながら俺はHRを受ける。

—————

「……ん……らん……蘭！」

と、声を出されたのでビックリしてしまう。

「で、どうすんだ？今日言うのか？」

と、巴が聞いてくる。

「うくん……」

実際私自身言う決心がついて居ない。

拒絶されるのが嫌なのだ。

嫌われるのが嫌。

離れていくのが嫌。

そうして私は答えを出す。

「今日、言う」

—————

ブブブ

携帯が鳴る。

「ん？蘭からか何だ？」

3：25 蘭「放課後話があるから屋上来て」

「ん？何だ蘭の奴、ま、いっかちょうど俺も話あるし」

そうしてスマホをしまうと、

「あ、あの真也君」

と、クラスの女子が話しかけて来た。

「あの、話があるの」

—————

放課後

ガチャ

俺がドアを開けるとそこには蘭がいた。

「済まんな遅くなった」

と謝ると、「ん、大丈夫」と、蘭は許してくれた。

「それで話の事なんだけどね」

と切り出そうとする蘭に俺はこう答えた。

「俺も話がある」そう言うと、蘭は話すのをやめた。

「何？」と、答えてくる蘭に俺はこう言った。

「今日、告白された」

—————

「今日、告白された」

その言葉を聞いた瞬間、私の心は真っ白になった。

「え？それってどう言う」

と聞くと、「ここにくる前にな、俺クラスの女子に告白されたんだ」

そう淡々と話すお兄ちゃんを見て私は泣きそうになった。

お兄ちゃんが遠くへ行ってしまう。

離れていってしまう。

その感情だけが、私の悲しみを込み上げさせるには十分だった。

グスッ

思わず泣いてしまう、でもお兄ちゃんは話続ける。

「そして俺さ「聞きたくないー！」」

思わず声を上げてしまう。

でもお兄ちゃんが話を止めようとはしなかった。

だから私は心の声を打ち明けた。

「わ、私はーずっと、ずっと前からグスッ

お兄ちゃんの事が！「待て蘭！」

お兄ちゃんが止めてくる。

「俺の話を聞いてくれ」

そう言ってお兄ちゃんがこう言った。

「俺その告白断ったんだ」

「俺その告白断ったんだ」

そう言うと、蘭はキョトンとした顔していた。

「ま、無理もないか「何で？」？」

蘭が声を上げる「何で断ったの?!」

これも蘭の気持ちだと思う。

俺から離れたくない、遠くに行かせたくない。

そんな気持ちを抱えて居たんだな。

そう感じた俺は蘭を抱きしめる。

「☒」そして俺も俺の心の声をブチまける。

「だって俺が好きなのは、幼馴染で、人前になると、見栄はって勘違いされて、巴達と一緒にのクラスになれなくて落ち込んでいる、

そんな美竹蘭が俺は好きなんだ」

俺の心の声を聞いた蘭の反応はどうだろう。

そんな確認さえできなかった。

俺は蘭に抱きしめられていた。

「もう、離れないで！」蘭の久しぶりの我儘だった。

「何言ってるんだお前」と、言うと蘭は

「ふえ？」と腑抜けた声を上げた。

「一度俺は蘭達から離れた。だが考えてみる、それ以外で俺は蘭から離れた事があったか？」

すると蘭は、「ううん、無い／＼／」

と、素直に答える。

「なあ、蘭」そしてまた俺は言う。

「俺と付き合ってくれないか？」

そう言うと蘭はまた涙をながす。

「あはは、今度は悲しい涙じゃ無いよな？」

と、聞くと「うん、私もずっと好きだった」

俺は柄にもなく嬉しくなった。

「そういえば蘭」俺は一度断られた提案をする。

「そろそろ名前で呼んでくれないか？」

と聞くと、蘭は「分かった」と、今度は承諾してくれた。

「なあ、蘭」

そう言いながら俺たちは帰路を辿っている。

「ん？何？」

と、蘭が答える。

「俺たち付き合ってるんだよな？もう」

というと、「何で疑問系なの」と突っ込まれた。

「いんや、何でもない、ほらは蘭家についたぞ」と、話している間に蘭の家に着いた。

「じゃあ、また明日な蘭」と、蘭の家から去ろうとすると、「待って！」と呼び止められた。

「？何だ蘭ん！」口に何か柔らかい物が当たっていると思っていいたら、それは蘭の唇だった。

「じゃあまた明日ね真也／＼／！」

そう言っつて蘭は家の中に入っていった。

「今の何でお前が照れんだよ／＼／」そんな事を思いながら、俺はまた帰路につき帰った。

次回 「美竹蘭と葛城真也のその後」前編

第五話 「美竹蘭と葛木真也」前編

「うくん」と、いつも通りの生活が始まる。

だが今は違う

コンコン、ガチャ

「おはよ、朝ごはん出来てるから早く下来て」

そう、アレから三年、俺と蘭は同性する事になった。

「しっかし蘭が居てくれて本当に良かったよー、俺一人じゃまともに料理出来なくてさ〜w」

と、蘭にお礼を伝える。

「べ、別良いよ。わ、私、し、真也の、か、彼女な訳だし／／／」

と、照れながら、言ってくる

（何これ可愛いんですけど、何その上目使い、何？俺を悩殺しようとしてるの？）

何て考えるのも、今の日常の”いつもどおり”だ。

「ま、大学遅れるしさっさと行こうぜ」

と、蘭に声をかけると

「遅れる原因は、真也に有るんだけど？」

と、痛いところを突いてくる。

「うっ、それは言い返せない…」

（くそっ、これから少し早く起きないとな…

しっかしどうすっかな”アレ”）

そう思いつつ俺はポケットの中に入っている、小さな黒い箱を握りしめた。

—————

「あー、今日も終わった〜」

そう愚痴を言いつつ、俺は背伸びをする。

「なあ真也」と、声をかけてくる俺の友達。

「ん？何だ？」と、聞き返すと思いがけない言葉が出て来た。

「ほら、美竹さん居るじゃんうちの大学の」

と、蘭の話題を出して来た。

「おん、有名だもんな美竹って」

そう、俺は大学でバレないように大学では蘭を美竹と呼んでいる。しかも蘭は、大学の中で有名だった。

もちろん、A f t e u o g l o u の活動をしていて有名だと言うこともあるが、実際蘭、いや、蘭達

、A f t e u o g l o u のメンバー達は、皆々美人なので、普通に人気だったりする。

「それで、美竹が、どうした？」

と、聞くと、「俺さ、美竹さんに告ろうと思うんだ」

と言って来たので、思わず「え？」と、言ってしまった。

「どうしてそんなに急に」と、聞くと

「俺前にな、A f t e u o g l o u のライブ見に行ったんだ、そこで一目惚れよ」

俺は心の中で（あくね）と、思った。

「でも大丈夫か？美竹って他の人から告られても断るって話だぞ？」

（まあ、実際彼氏（俺）がいるし断るのも当たり前なんだけどな）

と言いなから思う。

「ああ、でも俺はアタックしてみるよ」

すると友達がスツと、立って「それじゃ行ってくる」と言っ出て行った。

「はあ未だに慣れないな、俺の友達が俺の彼女に告白する相談を受けるのは」

そう呟きながら、帰る支度を進める。

俺の胸の中が物凄い痛いのを堪えて。

「美竹さん！俺と付き合ってください！」

はあ、またコレだ。

もう、何回目だろう告白されるのは、その度に真也が傷ついているのは。

「すみません、私は付き合えません」

と、いつものように断った。

こんな時に何を言ってるんだか……
すると後ろから「ニガサナイよ、蘭ちゃん」
と、友人が来た。

「下がってる蘭」俺は蘭を後ろに隠した。
「? ナンデ真也が蘭ちゃんを庇ってるの? まさか、二人って付き合っ
てるの?」

まずい、このままで行くと。

「ユルサナイ」やっぱり、切れるよな。

すると友達がポケットからナイフを出した。
「?!」

俺が驚いてる隙に、友達は飛び込んできて。
避けようと思ったが、避けるのを辞めた。
そう後ろには蘭が居たから。

グサツ

鈍い音が聞こえる。

「ひっ!」と、何故か怯えながら。

その場を去って行った。

「さ、流石に……避けると思われ……たか……」
ヤバイ意識が

「真也! しっかりして真也! ねえ、し……
や……し……」

そこで俺の意識は閉じた。

—————

グサツ

鈍い音が聞こえる。

ああ私はまたやってしまったのか。

また、大切な人を……

次回「美竹蘭と美竹真也」後編

最終話 「美竹蘭と葛木真也」

グサツ

鈍い音が聞こえる。

「ひっ！」と、何故か怯えながら。

その場を去って行った。

「さ、流石に……避けると思われ……たか……」

ヤバイ意識が

「真也！しっかりして真也！ねえ、し……や……し……」

そこで俺の意識は閉じた。

—————

「はっ！」と、俺は勢い良く布団を剥ぐ。

「……夢だったか……それにしても、出来すぎた夢だったな、俺なんかがあんな青春を、送れるわけないのにな」

そう思いつつ俺は居間に向かう。

「ん？そう言えば家ってこんなに広がったっけ？」俺は辺りを見回す。
そしてすぐに気づく。

（ああ、アレは夢じゃなかったのか……俺は長い昔の夢を見ていたのか）

すると後ろから、「え？し、真也？」と、声が聞こえる。

後ろを振り返ると、懐かしい、赤いメッシュが入った女性美竹蘭が居た。

「ああ、蘭か……いやな、少し前の夢を見たんだ、俺が大学時代に蘭を庇った奴の夢」

そうして淡々と話す俺に対して蘭は抱きついて来る。

「?!な、なんだ蘭いきなり抱きついて来て？」

と、尋ねると

「ば、バカア、ずつとずつと眠ってたんだよ？あの時からずっと待ってたんだよ？私」

蘭が何を言っているか分からなかったが、

蘭曰く、俺が刺された後、病院に運ばれたらしく、治療を受け傷は塞がったが、生憎俺の方が今まで意識が戻らなかつたらしい。

「す、済まんな蘭、てつきり俺は夢を見ていたと思ったよ」

「ん、でも良い真也が戻って来てくれたから」

そんな蘭の顔を見て俺は

「蘭、チョットいいか？」

と、尋ねる

「ん？何？」と、不思議そうに言ってくる。

ま、流石にいきなり言われたらそうなるわな。

だけど、ここで逃したらもうチャンスは無いと思った。

「蘭、俺と結婚してくれないか？」

そう言つて俺はポケットのの中に入っている黒箱を開けた。

「こ、コレって指輪？」

「そうだ、本当は、刺されなければその日に渡してたんだが、生憎それは叶わなかつたからな」

そう言つて俺は蘭に質問する。

「で、どうかな、俺と結婚してくれる？」

と、聞くと蘭は、「何言ってるの？」みたいな顔で、そして優しい微笑みを見せて……

「はい、喜んで！」

特に生きていて問題もなく16年を

過ごしてきた俺、坂木裕（さかきゆう）

は突然その時を迎える。

そう、俺は死んでしまったのだ

原因は道路に出た女の子をかばつての

死亡、でも大したことでは無い。

別に親しい友達が居た訳でもなく

家族が俺を心配する事は無い

そう俺は、孤独だった。

親にも見放され

学校ではいじめにあい

あげく結果この始末

誰も悲しまず俺の平凡な日常は去っていった

だけど今は違う。

仲間に恵まれ、友に恵まれ、そして、今嫁にも恵まれようとしている。

俺自身こんな人生送っていいのか？

と、思った事なんて指じゃ数えきれない程ある。

だからこそ、今は言える事がある。

葛木真也…… いや、美竹真也は……

バンドリの世界にて生きている。

「あつ、あとさ蘭に渡したいものがもう一つ有るんだけど」
「ん？何？」

「はい、コレ」

「コレって……」

「そ、俺が作った曲」

「で、でも何で」

「ん？ただ書きたかったから書いた」

「そんな、いつから」

「ん？確か高校卒業した後位？」

「っ／／／／」

「何で照れてるんだよ」

「いや、だって嬉しいから」

「そ、そうか面と向かって言われると恥ずかしいな／／／」

「み、見ても良い？」

「ん？ああ良いぞ」

「”ツナグ、ソラモヨウ”？」

「そ、お前らA f t e r g l o wをイメージして書いた」

「ありがとう／／／！」

「おう！」

「んじや来週から練習する」

「え？いくらなんでも早すぎないか？」

「早く無い」

「えー、絶対早いつてくだって……」

こうやって俺達の日常が過ぎて行くのだろう。
でも、俺と蘭は止まらない。
だからさ……皆んな……

俺達の背中を信じて付いて来てくれ！

氷川紗夜編

第一& a m p ;二話

氷川紗夜

紗夜とのデート

これは、あのバスケの試合から約数週間が経ったお話、そして紗夜がメインのお話。

「いや〜それにしても疲れた〜」

と、俺は愚痴をこぼしながら帰る。

「お疲れ様、真也」

と、隣を歩く彼女氷川紗夜

「でも良かったよ二人が仲直りできて」

と、言うのと

「いえ、貴方が寄りを戻してくれたのだから、貴方には感謝しないとね」

と、言い返してくる。

「嫌嫌、別に感謝されたくてやったわけじゃ無いよ」

「と、言うのと?」

紗夜が不思議そうに聞いてくる。

「俺のただの自己満足のためだけにやったけど」

そう、自己満足のためだけにやった。

「でも、その事故満足をする為だけの行動で貴方は二人の悩みを解決した。そうじゃない?」

紗夜は、優しい笑みを俺に向けた。

「そ、そうだな結果両方Win Winなわけだ」

そんな他愛も無い話をしていると、

「ねえ、真也」と、紗夜が言ってくる。

「ん?何だ紗夜」俺は、不思議そうに尋ねる。

「明日私と、で、デートしてくれないかしら／＼」以外だった。

元々紗夜は、そんな押ししてくるタイプじゃ無いと思っていだが、実際そうでは無いらしい。

「?でもデートだと俺たち付き合ってるみたいじゃ無いか?」

と、言うのと紗夜は不機嫌そうな顔をしていた。

「?どうした紗Y痛って!」

何故か足を踏まれた。

「わ、私と、その... 出かけるのはいやですか?」

と、紗夜が上目遣いで言ってくる。

うっ、だ、だめだ滅多に見られない紗夜の上目遣い、可愛い過ぎる

!!

流石に耐えきれなくなり

「お、おう!分かった、行けば良いんだろ?」

と、答えると少し微笑んで

「ありがとうございます」と、言ってきた。

コイツ、ハメやがったな?

「なあ、所でそろそろ敬語外してくれんか?俺敬語で話されるの慣れてないんだ」

と、提案すると「分かったわ真也」とあっさり承諾してもらった。

以外と敬語で話するのが一番慣れてるからとか言われそうだったのになあ

さて明日は色んな事が起こりそうな一日って予想がつくな...

そんな事を考えながら紗夜を家まで送って、家に帰った。

11:30デパート前

「よっ紗夜待たせたか?」と、先に着いていた紗夜に謝罪する。

「いえ、大丈夫私が早く来てただけだから」

最近紗夜が敬語を外してくれたおかげで少し話すのが楽になった。

(他の人の前でもこうすれば良いのに)

「真也、今失礼な事を考えて居なかった?」

と、唐突に紗夜は言ってきた。

「ん?いや別に(やべえー、何この人?超能力者?なんで俺の考えている事が分かる☒)」

と、何とかバレずに平然を保てた。

「で、紗夜、今日は何処に行くんだ？」

と、話題を変えようとする、少し不機嫌そうになりながらも、「き、今日は、水族館に行こうと思うのだけれど…」と、少し自信無さげに言ってくる。

「お？良いじゃん水族館、さ、行こうぜ紗夜「あつちよ」！」と、俺はさりげなく、紗夜の腕を引っ張って行く。

正直あの時は恥ずかしかった。

—————
と、言うことでやってきました水族館！

やけに紗夜の機嫌が良いようなので良し！

機嫌が良く笑顔、うん！マジ天使！

「？何かしたの真也？」と、疑問を持ちつつ言ってくる。

「い、嫌なんでも無い。ほ、ほら行こうぜ」

焦りながらも俺は紗夜の手を引いて水族館の中に入る。

—————
「いや〜それにしても凄いな〜」

何のなく想像していた水族館と違った。

「めっちゃ魚とかおるやん」

想像していた水族館の数倍凄かった。

「な、紗夜この魚なんて……」

俺が紗夜に面白そうな魚を見つけたので、言おうと思ったら、後ろに居たはずの紗夜が居なかった。

「お、お〜い紗夜〜」と、焦りつつも冷静に紗夜の名前を呼ぶ。

「？どうしました？」と、いきなり声が出た。

「☒な、なんだ後ろにいたのか」と、ちようど俺が振り向いた時に紗夜が後ろに居たそう。なんでも人混みに流されかけたとか。

「そんなんだったら危ないからほら、手繋ごうぜ」と、紗夜の手を握ると

「え？あ、あの、その、は、恥ずかしいのだけれど……／／／」と、なぜか照れる。

まあそれはそれで可愛かったので良しとする。

まあ、それから何もなく水族館を回ることが出来た。

え？何か進展はなかったかって？

は？あるわけ無いじゃん、俺チキンだぜ？

そんな、高等テクニク出来るわけw

まあ、そんなこんなでただ今紗夜と帰路を辿っている。

「今日は、ありがとな紗夜、おかげで楽しませて貰ったよ」と、念のためお礼を言う。

「い、いえ、私も楽しませて貰ったので。あ、後真也と出掛けられたのでそれでもう、十分ですから／＼／」ボソ

と、何か言っていたようだが聞こえなかった。

「そっか、ほんじゃ、またな紗夜」

そう言って紗夜と別れようとした時に、

「ま、待ってください！」と、呼び止められた。

「ん？何だ？紗夜」と、質問をすると、「ま、また今回のように一緒に出掛けてくれますか？」との事……はあ、

「何当たり前な事を言ってるの？俺は、いつだって紗夜のそばに居るから」そう言って紗夜を見るとものすごい勢い顔を赤らめていた。

そこで俺はどれだけヤバイ事を言ってしまったのか察して、「そ、そんじゃ、ま、またな／＼／」と言って紗夜と別れた。

中々紗夜が白状しないな... ならコレならどうだ？

「そつか、そつかならコイツは抱っこさせてやれないな？」と、言いながら紗夜を見る。

少し不満げな顔をしているが、俺は畳み掛けるようにして言う。

「そうだよなあ、犬好きじゃ無いんだったら、抱っこもさせられないなあ」と、またまた紗夜の方を見ると、涙目になりこちらを見ていた。

「わ、悪かった、悪かったってほら」

「え？」

俺は紗夜に犬を差し出したが、キョトンとした顔で見られた。

「したかったんだろ？抱っこ」

「っ／＼／＼／＼」

こりや凶星だな

「それとも抱っこしたくない？」

「っ！いえ、させてもらいます」キリッ

そんな事でキリッとかやめて下さい

「ほい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

そしておい、犬ころお前紗夜に抱っこして貰ってるからって、露骨にドヤ顔すな

ん？何でドヤ顔してるって分かったんだ俺

「ところで紗夜さん一つ提案があるのですが……」

「？何ですk 「ワン！」ち、チョットやめて下さい／＼」

おうおう、なんだこの犬、可愛いと思ったら、ただのエロ犬じゃねえか

何紗夜の顔舐めとんねん56すぞ

☒

お？俺の殺気が伝わったか、まだまだじやの

「それでだ」

「犬カフエ行かn 「行かせていただきます」お、おう」

やっぱ紗夜って犬好きだったのか。

以外なギャップが見れたわ

「あく疲れた」

「ご、ごめんなさい／＼／つ、つい夢中に」

え？何でこんな俺が疲れてて紗夜が誤ってるかって？

それは簡単な事さ。

1. 犬カフェ行ったらめっちゃ紗夜が犬に囲まれたので触れ合っ
て居たら時間がヤバかった。

ま？コレぐらいならええやん。って思うやん

2. 紗夜が異様な位ポテトを食べて野口さん軽く二人位逝った

ま？コレぐらいかのくでも紗夜があれほどまでにジャンクフード
(主にポテト)が好きだとは……それにニンジンが嫌いと分かった
ぜ(ゲス顔)

「ま、まあ今日が楽しかったから別良いよ」

そうだ、紗夜のギャップが見れただけでも良しとしよう(ωω)

「つ／＼あ、ありがとう」

で、何でさつきから照れてるのかな？

「い、いえ別に、ふ、深い意味は無いです」

「軽く心読むの辞めてくれない？」

なんて他愛もない話をして、今日も一日が終わる。

「もつと、真也と一緒に居たいのだけれど…」ボソ

「？何か言ったか？」

「い、いえ何も」

絶対なんか言ってたよね？

「ま、いっつか、ほれ、家ついたぞ」

「あ、ああ、今日は楽しかったですありがとうございます／＼ございます」

うん、敬語まだ少し入ってるね。え？外したんじや無かったのかつ
て？それは作者の気分だからしょうがない、作者は設定おも軽く凌駕
する権力をもっているからな！

「俺も楽しかったよ紗夜」

「つ／＼ず、ズルイわよ、そんなの」

お？照れたな？

コレはウハウハですな

「それじゃまたな紗夜」

「ええ、また出掛けましょう真也」

そんな感じで紗夜と別れた。

(でもなんだろうな、この感じ、紗夜と居ると胸が熱くなったりして・・・ ああ！考えるだけ無駄じゃな)

そうして、彼は考えるのを辞めた。

次回「思い」

第四話 思い

突然だが、皆んないきなり胸が熱くなったりしてする？

いや、別病気とかそういう類じゃないんだ。

特定の人と居るとなるんだけどね、ソレが何か分からないんだ。

……いや、「分かっている」けどそれから目を逸らしているのかも知れないな。

—————

突然ですが、皆さんはいきなり胸が熱くなったりした事は、まりますか？いえ、別に病気などそういう類では無いのです。

そ、そのある人と居るとなるんです。

でも、この気持ちに分からないんです。

……いえ、この感情が「好き」という事が分かって居ながら、それから目を逸らしているのかも知れませんか。

—————

「ふあ〜」

いやあ、今日は快晴だなあ、こりや散歩にでも行くかな。

俺は早速準備をして家を出た。

「ん？なんだ？」

今、家の前に誰か居たよな？

チヨット見てみるか

ん？ん？んんんんんんんん？

アレレ〜おつかしいぞお〜何でうちの前に、紗夜が居るんだ？

「あ、あの〜紗夜さん？うちの前で何をしてるんですか？」

「っ！し、真也！」

え？何でそんな驚いてんの？ここ、俺ん家だから当たり前じゃね？

「で、何やってんの？」

「いや、別に、あの、天気が良いから、散歩にでも誘おうかと」

あつ、そう言う事が〜それなら納得ダア

「じゃねえよー！」

「！どうしたの？」

「いや、どうしたの？じゃねえよ、何で紗夜がうちの場所知ってるの？」

いや、別何も悪くないけど、なんか怖いじゃん、うちの場所教えてないのに、場所知ってるの怖いじゃん！

「べ、別に…青葉さんから聞いたのですが…」

「あつ、そういう事か」

モカのやつ… ナイス！今度何か奢ってやらんな。

あ、でもアイツ無駄に胃がブラックホールだから財布が終わるかもな。

「ま、そんじや行くか、散歩」

「え、ええ」

そうして、俺たちは商店街の方へ足を運んだ。

や、やべえ何にも話すことねえ

このままじゃ空気が重いままになっちゃう…！

「あ、あの一つ聞きたい事が有るのですが」

「？な、なんだ？紗夜」

「胸が熱くなる、若しくは苦しくなる時ってありますか？」

意外な質問だった。

最初は、胸の病気なのかな？なんて思っていたが、それは少し違った。

「そ、それはどう言う…」

「え？あ、ああ別深い意味は無いのですが、ある人と居ると、胸が熱くなるんです。でも、その気持ちかわからくて…」

ああ、その感覚分かる、俺は… いや、正確には俺達は、この感覚を知っている。

「済まん、俺もよく分からん、でも、ある人と… いや、紗夜と居るとそんな感覚になるな」

「っ／＼／！」

アレ？待てよ？コレって俺やばい事今言ってる？ええい、もうどうにでもなれ（ヤケクソ）

「私も」

「？」

「私も、その、真也と居ると、む、胸が熱くなります／＼／＼」

あつ、コレアレやん、俺と同じ考えやん

でも、ここで俺の考えも言わんとな

ってかまた敬語入つとるやんけw

「でも」

「でも？」

「でも、俺達は、その感情に気づいている」

「…」

…… やっぱ俺と同じか。

「俺達は、分かっているながら、それから目を逸らしている…… 違うか？」

「……………」

未だ沈黙する紗夜

でも紗夜も少なからず俺と同じ感覚で有る事は確かだ。

「… そう……… ですね」

「？紗夜？」

その時の紗夜の顔は今でも鮮明に覚えている。とても、とても悲しく…… とても暖かかった。

「私達は、目を逸らしている…… それは事実です、私は多分この関係…… 真也との関係を崩したくないんだと思います」

「紗夜……」

「この気持ちがあるのか知っています、何故こんな気持ちか、湧いてくるのか知って居ます、でも、それでもやはり気付かないふりをしてしまうのです。どうなっても構わない、ただ、真也との関係を崩したくなかった、その一心で私は、この気持ちから目を逸らして居るんだと思います」

なおも紗夜は、話続ける。

自分の思いをぶつけるために。

「でも、今日会って改めて確信してしまったの」

「確信？」

分かっていても、分からない振りをし続ける
それが、どれだけ辛いことかも分かっている
でも、それでも俺は……

「もう、分かってしまった、気づいてしまったんです、この気持ち
が……」

”好き”と言う感情だと」

ああ、やはりこうなってしまうのか。

でも紗夜は覚悟を決めた眼差しをして居る。

俺も気づいていたさ、この気持ち、紗夜に向けるこの感情が……

”好き”である事も。

「っ！」

ゴメンな、紗夜……

今の俺は、紗夜とは釣り合わない、だから、待っていてくれ、俺が、
俺から紗夜が好きと言える、その時まで……

「ゴメン紗夜」

「っ！」

「それは、紗夜が言う事じゃないんだ……」

「え？」

何腑抜けた声出してんだ？紗夜

俺だって腹括ってんだぞ？だからさ、後少しだけら待っていてく
れ。

「いつか、俺が、俺から紗夜が好きと言える日まで、待っていてくれない
か？」

「っ！…… ええ、分かりました……いえ、分かったわ、その日を楽しみに
待って居るわ、真也」

「ああ！楽しみに待っていてくれ！」

そう、いつか言える日まで……

次回「帰路での事件」

第五話 「帰路での事故」

アレから数分、俺は紗夜と話しながら散歩をしていた。

「おっそろそろ暗くなってきたな」

「え？ああそういえば、もうそんな時間なのね」

その時はもう17:00位で少しづつ日が沈ん出来たところだった。

「…… もう遅いし送ってくよ」

「あ、ありがとう」

その時の空気は心なしか重かった。

まさか、あんな事が起こるとは……

「それで今井さんがね……」

「ほえ、リサってそんな事も出来るのか」

と、俺は紗夜を送って行く時に、Roseliaの、メンバーの話をして帰っていた。

話によると、リサは、何でも料理が物凄く上手らしい。

今度、食わせてもらおうかな……

そんな事を思っていた所だった。

「ぎ……ん…… 紗夜ちゃん……」

と、明らかに怪しい男の人が紗夜の名前を言いながらコッチに近づいてくる。

出来れば面倒事にならないと良いが……

なんて思っただけでもそう上手く行かない。

「紗夜ちゃああああああん！」

「☒」

「紗夜俺の後ろに下がってろ！」

「は、はい！」

明らかにコイツは紗夜を狙ってきている。

そう言われてすぐさま、リビングに行った。

「ああお帰り紗Y「お父さん！」な、なんだそんな息切れなんかして」
「わ、私の友人が、私が、襲われそうになって、それを庇ってさそのまま...」

「何?!それは大変だ!その彼は何処に?」

「すぐ近くの公園に...」

そう言うと、お父さんはすぐさま警察の連絡と、私と一緒に、彼の所へ向かった。

公園

「真也!今助けを呼びn」

そこからは、声が出なかった。

そこには、包丁を持って倒れて居る、私を襲った男性と、腹部から血を流して倒れて居る真也が居た。

「真也!」

私はすぐさま、彼の元へ駆け寄った。

彼は、酷く衰弱していた。

「紗夜どうした... って!どうなって居るんだ!と、取り敢えず救急車を...」

お父さんは、見た事も無いほど慌てていた。
すると彼が

「へへ、済まん紗夜... 少しハマしまった...」

彼は痛みを堪えて居る様に、私を心配させまいと、笑顔を作っていた。

「どうして、どうしてこんな事に...」

数分前

「オラ、どうした?オッサン動きが遅いぜ?」

アレから数分、紗夜は無事、家に着いたのだろうか、そんな心配をして居ると、男が自分のバッグを漁り始めた。

「おい、何をして居る...」

「へッへッへ、コイツだよ...」

「っ！それは！」

男が、取り出したのは包丁だった。

多分、これで紗夜を……

「お前……！」

「これで、終わりだ！」

と、包丁を振りかざして来るが、やはり遅い。

「包丁持っても、動きが遅ければ意味が無いぞ」グサ

そんな音が鳴りそうなくらいの感触が、腹部に伝わって来て、それと同時に、痛みが走った。

そう、男は包丁を二本持っていたのだ。

「へッ、ザマア見やがれ、お前みたいな奴が、紗夜ちゃんと釣り合う訳ないだろ！」

「っ！」

ヤベ、痛い所突かれたな（両方の意味で）

このまんまだと、俺が殺られるな……

「こうなったら……」

「？おい、何をするつもりだ?！」

へッ、これでも喰らえ蘭直伝！

”腹パン”!

「グエー！」

なんて言うキモい言葉を発しながら、倒れる。

「蘭直伝の腹パン強くな？」

なんて、言っていると、視界がグラついて来る。

あつ、コレ結構ヤバイ奴だ。

なんて思いながら俺は意識を失った。

「……し……や……真也……」

最初に視界に入ってきたのは、紗夜だった。

しかも後から紗夜のお父さんらしき人が、

「紗夜どうした……」
「どうなって居るんだ!」と、取り敢えず救急車を……
「なんて、慌てた様子でくる。」

どうやら無事、家に着いて、助けを呼んでくれた様だ。

だけど、肝心の俺がこれだ。

流石に紗夜に心配は、掛けられないよな。

だから責めて……

「へへ、済まん紗夜……少しへましちまった……」

少しでも不安を減らそう。

そうして、俺は痛みを堪えながら、笑顔を作った。

……なんだよ、なんでそんな悲しくそうな顔してんだよ、お前に

は……… 笑顔が……… 一番……… 似合……… っ………

俺の意識はそこで切れた。

次回「願い」

第六話 「願い」

暗い

ここは何処だ？

でも、悪い気はしないな…

でも何でだろう？

誰か俺を呼んで居る…

―――
彼が刺された事故から約三週間経った。

未だ、彼は目を覚まさない。

医師から聞いた話では、傷もかなり深く、重症なのだそうだ。

そして、最後に言われた言葉、ソレが

「… 大変言いにくいのですが、最悪の場合、彼が目覚ますことは無いかも知れません」

その言葉を聞いた瞬間、悲し気持ちが湧かなかった。

それよりも、彼が戻ってこないかも知れないと、その事を知った時点で、私の胸の中では、ポツカリと大きな穴が出来た。

そして今日も、私は彼のお見舞いに来ている。

「お久しぶりです、真也」

「…」

「… 最近、貴方のお見舞いばかりで、あまりRoseliaの練習には行っておりません」

何故か分からない。

彼も練習に行つて欲しいと思つているかも知れないのに、何故かギターが弾けない。

このギターのせいで、彼は傷付き、そして眠ってしまったのだ。

その現実が、私を縛り付けた。

ガラッ

突如病室のドアが開かれた。

「… 貴方は」

「私は葛木君の親戚です」

驚いた。彼に母親は居ないのか、気になった。

「あ、あの」

「?はい、何かしら?」

「彼のご親族は...」

その言葉を聞くな否や親戚の人が苦しそうな、顔をした。

「...彼のご親族はね、事故にあって亡くなってしまったの」

「っ!」

そうか、彼はずっと孤独だったのか...

それに気づかず、私は...

「でもね、最近の葛木君、物凄く楽しそうだったのよ?」

「え?」

その言葉を聞いた瞬間、疑問が出てきた。

何故、辛い思いをしているのに、楽しそうなのか、その疑問が出てきた。

「最近の彼「自分が守りたいと思える人が出来た」なんて言って、楽しそうに話していたのよ?」

「後それと、刺される前に彼が、もし何かあったら貴方にコレを渡す様になって」

そうして差し出されたのは

「手紙?」

私は気になり、すぐに手紙を開いた

紗夜へ

背景氷川紗夜さま

こんなかたつ苦しい事を書く暇もないんで、すぐ言います。

まず一つ、コレを呼んでいると言う事は、俺の身に何かあったと言う事だな?

ま、それで紗夜が無事なら良いんだけど。

そして二つ目、どうせ紗夜の事だから、落ち込んで、練習したくてもギターが弾けないなんてことになってるかと思う。

ま、なってなければ一番良いんだが...

だからこれだけは言っておく。

ギター辞めんじゃねえぞ。
どんだけ辛くてもな、俺は紗夜のギターの音が好きなんだ。
でも紗夜がギターを辞めたら、それがもう叶わなくなる。
だからさ、頑張つてギターを弾いてくれ。
それが俺の頼みだから……

葛木真也

「っ！」

これと呼んで居る内に、涙が自然と流れてきた。

コレがら温もり、コレが悲しみ

そこで私は泣いた。

もうこれ以上泣けないぐらいまで泣いた。

でも、病院を出るときは何処か吹っ切れた様な顔をしていた。

「ありがとう真也、私は止まらない……」

「ん？(こ)は？」

俺が起きると、そこは真っ白な空間だった。

何処までも続いている終わりの無い空間。

「お？目が覚めたか真也」

「？誰だつて、え？」

そこには、死んだはずの親父と母さんが居た。

「え？なんで？だつて親父と母さんは、事故に巻き込まれて……」

「ああ、そうだ、でもお前も最近のことで、その様な事はなかったのか？」

そう言われて思い返す。

あつ、あつたわw

「あつた様だな、ここは生と死の狭間だ」

「へえくそうなんだ」

「ハハ！随分と物分かりがいいじゃないか」

「んな事言われてつて、実際紗夜を守るために刺されてコレが現実でしたつてなる方が信じられんわな」

「まっ、そうだな…」

そこから色々な説明を受けた。

親父達が俺を迎えに来たことも…

「てなわけだ、ほんじゃ行くぞ」

「…ゴメン親父、俺はまだそっちは行けねえ」

「… そうか、なら行ってこい！みんな待ってるぞ！」

そう言われて、背中を押される。

そうか…親父の手ってこんなにも大きかったのか…

「ありがとう親父…」

そうして俺の視界は、光に包まれた

次回「再開」

第七話 再開

冬の季節が来た。

彼は未だ目を覚まさない。

でも私は前を見る。

彼との約束を守るために……

「今日は、ここで終わりにしましょう」

珍しく湊さんが早めに練習を終わらせた

「それじゃ皆さんさようなら」

「ええ、さようなら」

こうして皆人と別れる。

そうして、今日も、彼が居ない日常が続く。

そんなある時

ピリリリと携帯が鳴る。

ロック画面の表示が、彼との水族館に行った時の写真があった。

「はい、氷川です……え？」

私は、すぐさま病院へ向かった。

そう、彼が亡くなったそうさ。

その現実を受け止めきれず、私は急いで彼の病室へ向かった

「し、真也……」

だが、遅かった。

彼のベッドにはもう何も残っていないかった。

「あ、あああああああああああああああ！」

私はその場で泣き崩れた。

私が彼を奪った。

皆んなの彼を奪ってしまった。

その後悔で私は胸がいつぱいになった。

《BGMキミにもらったもの》

12月25日クリスマス

私はいつも通り、皆などとライブの打ち上げ、と言うより反省会をしていた。

「…っと、こんな感じかしら」

「そうだね、友希那それじゃもう遅いし、皆んなで帰ろっか☆」

そう言った今井さんに続いて私達は店を出る

ブブブっとスマホが震える

「?皆さんチョット待っていて下さい」

そうしてスマホを取り出して私は目を丸くした。

”着信葛木真也”

私はすぐさま通話ボタンを押す

「あくもしもし紗夜? 済まんな、コレ前の手紙と一緒に、俺が何かあったときに送られる様になってる、留守電だ」

そういう彼は、とても楽しそうだった。

でも彼はもうこの世には居ない。

その現実がある。

すると、空から雪が降ってきた。

「お? 紗夜これって初雪じゃね? 今年以降るのが遅かったから、心配したよ」

「そうね… ってえ?」

今彼の口から”初雪”と言うワードが出てきた。

何故、今の状況が分かるのだろう。

仮に去年だとしても、不自然すぎる。まだあっても居ない時期なのだ。しかもタイミングよく、雪が降ってきたと言うのだ。

あまりにもおかしすぎる。

「え? っつてそれは…」

彼はそのまま続ける。

それに反応して私は周りを見渡す。

そして近くの電柱から視線を感じてそちらを向くと。

『何ででしょうかね?』

携帯から聞こえてくる声と全く同じ声、そう
彼が立っていたのだ。

「え？真也…でも、真也は亡くなったって…」

「ハハ！引つかかったのなアレにw」

「え？」

「あれ実はな」

「ん？(´▽`)は？」

俺が目覚ますと目の前には知らない天井が広がって居た。

「せ、先生！葛木君が！」

と、ちようどきたさんナースが慌てて先生を呼びに行く。

メツチャテンパつとるやんw

そのあと先生から聞いた話では、あの後かなりの重症だった様で、目を覚ますか分からなかった様で、奇跡だ、何て騒いでいた。

でも先生にちようど一つ頼み事があった

「先生チョット頼みが在るんですが…」

そう、その頼みこそが、紗夜以外に無事を知らせて後から実際に会いに行くドツキリだったのだが、実際の彼女は、その事実を受け止め切れず、かなり気を病んでしまったので、結構罪悪感があったのだが、結局成功した

「まっ、こんな感じ」

そうして一連の流れを紗夜に説明すると

「えっ？ちよまっ」

はい、ご察しの通り抱きつかれました

「バカア…ずっとずっと待ってた。でも病院から真也が亡くなったって聞いて、ずっと胸が痛くて、それで…」

「…ああ、済まんかったな、心配掛けちまって」

「うああああああああああああん！」

そこから数分俺は紗夜が泣き終わるまで、抱きしめて居た。

「…」グスン

「済まんかったって！紗夜、このとうり！」

ただ今紗夜に全力のDO☆GE☆ZAをかましている

「ダメです許しません、私を悲しませたんです、今までの分、甘えさせて頂きます」

「え？何だ怒られるかと思った（。D。）それなら今までの分も、これからの分もいっぱい甘えいいぞ？」

その言葉を聞いた紗夜はとても嬉しそうだった。

「あ、後もう一ついいか？」

「？何ですか？」

今、ここで言おう、そして、紗夜とともに歩んで行こう。

「俺と付き合ってください」

お？何目丸くしてんだ？早く答え下さい。早くしないと失神してしまいます。（怖くて）

「ええ、喜んで！」

彼女は、今までの笑顔の中で、一番綺麗な、笑顔をして答えてくれた。

アレから家に一緒に帰って紗夜の親に報告して、日菜にメツチャ言われて。

こうして俺と紗夜は、付き合い始めた。

次回「氷川紗夜が以外とポンコツで可愛すぎる件について日菜と話をしたい」

最終話「氷川紗夜が以外とポンコツで可愛すぎる件について日菜と話をしたい」

「うん」

よう！俺は氷川真也！大学生！

最近結婚したばかりのチキン野郎だ。

「ところで真也君、お姉ちゃんじゃなく、私に用事とは何かね…」
何故かメツチャニヤニヤしてコツチを見てくる日菜。

そんな目で見られたら勘違いしちゃうでしょうが（＊、ω、）

「ん？ああ、それはな、日菜」

「うんうん！」

「紗夜ってなんか以外とポンコツだよな？」

「それ、わかる（。▽。）」

いや、即答かい

少しは労ろうぜ？

姉なんだろう？

「ま、まあそれでなんだがな、実は…」

「そうそう、分かる！」

「だよなあ、しかもその時さ…」

とこんな感じで日菜と紗夜について語っていると、等の本人が来た。

「づいぶんと、日菜と楽しそうにしてるわね、あ☆な☆た☆？」

こんな時だけそれを使うのはずるいと思います。

「流石に可愛すぎて死んでしまいます」

「な、な／＼／」

あら？いつのまにか声に出っちゃった？

てへ☆

「てへ☆とか流石にるん♪って来ないよ真也君…」

「さらっと心を読むな日菜」

「ところで何について話していたのですか？」

おっ・聞いちやうそれ？聞いちやう？

「何ってそりやな？」

「ねえ？」

「な、何よ…。」

「紗夜（お姉ちゃん）が、ポンコツで可愛すぎるって話なんだけど…。」

「なっ／＼／」

「なんて話をしているんですか／＼／！」

そのあと夕飯にしようとしたが、紗夜が水の量を誤って、メツチャ硬い米が出来ました。

やっぱ紗夜ってポンコツで可愛すぎるな…。

次の日

「よし日菜、準備は出来たか？」

「オツケーだよ！真也君！」

フッフッフゝついにこの時が来た！

名付けて！

『紗夜の寝起きの写真を撮りまくろう！（あわよくば一緒に寝たい！）作戦！』

説明しよう紗夜の寝起き以下略は、その名の通り、紗夜の寝起きの写真を撮りまくる。

ただそれだけのシンプルなものである！

ただそれ故に中々決心があるミツシヨンである。

だが！今日その日がやって来た！

日菜と完璧なまでに考えられた紗夜の寝起き時間帯！そして！紗夜がまだ寝ている時間帯に！あわよくば一緒に寝たい！

それらの意思を背負い、いざ行かん！戦場に（紗夜の部屋）！

作戦決行時

「真也君、一つ注意して」

「ん？なんだ日菜、注意とは？」

「お姉ちゃんを観察していてわかった事がある」

それを聞きながら俺は部屋に入る。

よし、紗夜はまだ寝ている！行けるぞ！

ガチャ

え？ガチャ？

「お姉ちゃん、朝たいぶ酔った感じになってるみたいで抱き枕にさせ
るよ！」

え？ひ、日菜さん？今なんと？

だ、抱き枕？それは羨mゲフンゲフン

ヤバない？

その瞬間俺の後ろに人影が…

そこには案の定紗夜（寝起き）が立っていた。

「お、おはよう。さ、紗夜」

「……」

ねえ、紗夜…無言で近づいて来るの辞めない？

ねえ怖いよ？えっ、ちよまつ…あく！

その後、紗夜がちやんと起きた時に隣に俺が居たので物凄い身体を
いやらしくして、『昨日は…激しく』『そこまで！』…意地悪』などと言
うやり取りごがありましたとさ☆

え？日菜？そりや逝かせましたよ？

完

バンドリイベント それぞれの道、結ぶ茜空
お気に入り百人突破記念 Roselia
編 皆んなで let's cooking!

とある日曜、俺はいつも通り愛用のギターのチューニングをして居た。

ブーツブーツ

「モスイモスイ?」

「真也さん、ふざけているのですか?」

あつ、ヤツベ紗夜さんでしたか?… 死んだな

「で、なんの用だ?」

「バンドの中で、今日料理会をしようと言う話になったのですが、今井さんしか手慣れている人が居なくて…」

「それで俺を頼ろうとした…と?」

「はい…」

うん、嬉しいね!

何この羨まイベ、神キタ(??'ω??)??

こりや即答の一手しか無いわなw

「オケ、そんで何処でやるんだ?時間は?」

「はい…それが真也さんの家で、今からです」

「…… 彘?」

「だから、真也さんの家で今からです」

「アツハツハーナニツイッテルノカナ?」

紗夜さん… どうとう頭がおかしくなつて

ピンポーン

「ん?宅配便か?」

ガチャ

「ヤツホー遊びn料理しに来たよ☆」

「か☆え☆れ☆」

「お邪魔しまーす」

あつ、此奴らやりおるな

でも材料がない気が・・・

「冷蔵庫を拝見させていただきます」

「あつ、紗夜それだけは辞めろ！」

俺が紗夜を止めようとするとりサとあこが俺の手を掴んでくる。

「ちよつとじつとしてもらうよ？」

「真兄い、離さないからねえ」

「HA☆NA☆SE」

冷蔵庫だけは、冷蔵庫だけは絶対にダメだあ

あつ、上にあるエ○本もダメだわw

「私はちよつと真也の部屋を調べて来るわ」

「辞めろおお地味に人の心を読むなあ！」

ガチャ

紗夜の存在を忘れてしまっていて冷蔵庫が開かれる。

「・・・真也さん？」

「ハインデシヨウ」

コレは終わったな

俺の家の冷蔵庫の中はほぼ空だった。

そういえばここ最近スーパーなんて言っていないや☆

すると上から友希那が降りてきた・・・エ○本を持って。

「・・・真也、コレは何？」

「俺には何も見えないn「何？」ハイエ○本デス」

俺は二回殺られる事が確定しました。

さらば人生アイルビーバック（＾ω＾）

「コレは私達が養わないといけませんね」

「コレは焼却炉に捨てなきゃ」

あの紗夜さん？なにしれつと恥ずかしい事を言っているんですかね？あと友希那、それはさせん。

「あ、あの紗夜？」

「なんですか？」

「不束者ですがよろしくお願いします」

「な、なにを言ってるんですか／＼／＼」

お？効果覲面じゃなあ（☒ ?? ☒）

わっはっはーこりや儲けだm

あの皆さん？なんでそんな怖い顔でコツチに来るんですかね、あと
リサさんと友希那さんそんな拳を握らずとも……

「覚悟は出来てるのよね？」

「流石にちよつとカチンと来たかな？」

「真兄い〜？」

「し……真也さん……そ……それはダメです」

ジリジリと距離を詰めてくる四人、紗夜さん助けて下さい……って
なに頬赤く染めてんねんちよつと可愛いと思っでまうやろが。

「え？つちよ……まっ……」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その日ある家から青年の叫び声が聞こえたと言う。

因みにこの後皆さんで楽しく料理しました。

あ……でも、もう余り友希那に料理はさせない方が良くと学んだ

Z A ☆